



文部科学省国立大学改革強化推進補助金事業

大学間連携による教員養成の高度化支援システムの構築  
—教員養成ルネッサンス・HATOプロジェクト—

# 教職基礎体力を備え 国際感覚に優れた 教員の養成充実に向けた 改革プロジェクト

## 報告書

大阪教育大学教員養成開発連携センター



## ～ はじめに ～

「教職基礎体力を備え国際感覚に優れた教員の養成充実に向けた改革プロジェクト」は、大規模教員養成系単科大学である北海道教育大学、愛知教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学の四大学が日本の教員養成の質保証と高度化を目指して「教員養成開発機構」を設置し、教員養成における共通の課題を整理したうちの、「教育政策への迅速な対応」に関する取り組みの一つである。

OECD がグローバル化社会において強調する 3 つの「キー・コンピテンシー」の一つである「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」を獲得するためには、外国語によるコミュニケーション力の習得が不可欠であり、とりわけ、次世代の学校教育を担う教員養成系大学の学生は、国際的な発信力の基礎となる「実践的な英語力」が求められている。

日本においては、学校教育の中で児童の国際的なコミュニケーション力の基礎を涵養するために、小学校英語が教育課程の中に取り入れられているところである。教員を目指す学生は、従って、この面での教授能力を習得し、かつ、その能力を証明するためのエビデンスを 4 技能の能力試験の結果、スコア等で明確に示す必要があると考えられる。

グローバル化が一層進展していく国際環境の中で、社会や教育現場の多様な環境にモラルを持ちつつ柔軟に対応できる資質を身に付けるうえで必要なコミュニケーション能力の習得のための多面的な試みを、4 大学が協力して取り組んだのがこのプロジェクトである。

大阪教育大学においては、TOEFL-ITP の導入と義務化、4 技能の能力証明に向けての Progress テストの導入、また、外国語学習環境の整備のための外国語学習支援ルーム（Global Learning Community）の設置とその活動、地域における英語教育活動支援の取り組み等を通じたプロジェクトの実質化が行われた。

愛知教育大学においては、2012 年から行ってきた TOEIC の分析結果を踏まえた、成果獲得のための新たな取り組み、新たに設置された英語サポートセンターによる外国語学習支援の取り組みが行われた。東京学芸大学においては、4 技能の効率的な習得のための英語集中演習の導入と英語集中訓練プログラムによる英語力強化活動、また、英語指導力の育成のための英語指導実践演習の活動が行われた。北海道教育大学においては、TOEIC 受験による学生の英語能力証明への取り組み、小学校英語に係る地域貢献の取り組みが行われた。

これらの取り組みを通じて、小学校英語の導入を始点とする教育課程における国際的なコミュニケーション能力習得のための新たなモデルの構築と今後の学校教育の現場の先導的な役割を果たすことを志すものである。

平成 30 年 3 月吉日

大阪教育大学

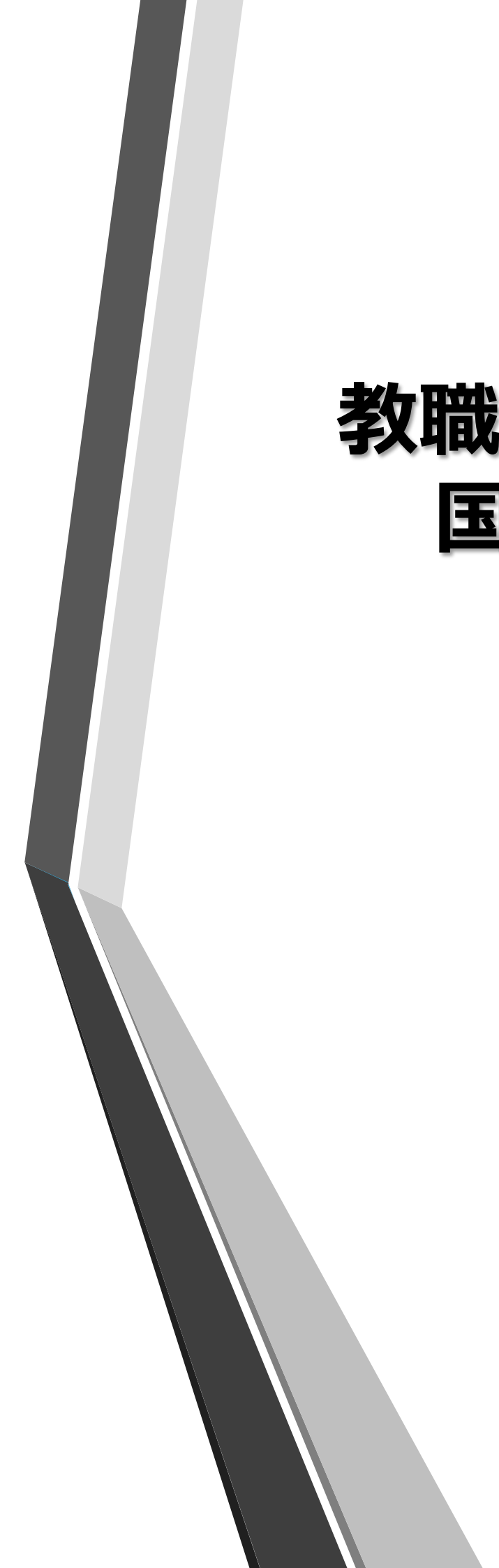
教員養成開発連携センター長

理事・副学長

岡本 幾子

# 《目 次》

|                                        |                                     |    |
|----------------------------------------|-------------------------------------|----|
| はじめに                                   | 大阪教育大学<br>理事・副学長 岡本 幾子              |    |
| 第1章 教職基礎体力を備え国際感覚に優れた<br>教員とは何か        | 大阪教育大学<br>英語教育講座 吉田 晴世              | 1  |
| 第2章 大阪教育大学における取組                       |                                     | 7  |
| 1 大阪教育大学の英語外部試験の実施<br>方策と質保証           |                                     |    |
| 1-1 TOEFL-ITPに関して                      | 大阪教育大学<br>グローバル教育講座 安部 文司           | 8  |
| 1-2 TOEFL-ITP分析結果                      | 大阪教育大学<br>情報処理センター 城戸 楓             | 12 |
| 1-3 Progress導入の背景と実施結果                 | 大阪教育大学<br>英語教育講座 橋本 健一              | 18 |
| 2 大阪教育大学における外国語学習支援<br>ルームの取組          | 大阪教育大学<br>外国語学習支援ルーム 高田 恵子          | 21 |
| 3 大阪教育大学の地域における英語教育<br>活動支援の取組         | 大阪教育大学<br>英語教育講座 吉田 晴世              | 52 |
| 第3章 愛知教育大学における取組                       |                                     | 55 |
| 1 愛知教育大学における英語外部試験の<br>取組              | 愛知教育大学<br>外国語教育講座 小塚 良孝・田口 達也・浜崎 通世 | 56 |
| 2 愛知教育大学における外国語学習支援<br>－英語サポートセンターの取組－ | 愛知教育大学<br>稲垣 真由美・山田 美樹・長峯 貴幸・小塚 良孝  | 60 |
| 第4章 東京学芸大学における取組                       |                                     | 65 |
| 1 東京学芸大学における外国語学習支援                    | 東京学芸大学<br>馬場 哲生                     | 66 |
| 第5章 北海道教育大学における取組                      |                                     | 71 |
| 1 北海道教育大学の英語外部試験の取組                    | 北海道教育大学<br>萬谷 隆一                    | 72 |
| 2 北海道教育大学における外国語学習支援                   | 北海道教育大学<br>萬谷 隆一                    | 72 |
| 3 北海道教育大学における地域支援の取組                   | 北海道教育大学<br>萬谷 隆一                    | 72 |
| おわりに                                   | 大阪教育大学<br>英語教育講座 吉田 晴世              | 74 |



# 第1章

## 教職基礎体力を備え 国際感覚に優れた 教員とは何か

## 教職基礎体力を備え国際感覚に優れた教員とは何か

大阪教育大学 吉田 晴世

文部科学省によると、義務教育の目的・理念として、「変革の時代であり、混迷の時代であり、国際競争の時代である。このような時代だからこそ、一人一人の国民の人格形成と国家・社会の形成者の育成を担う義務教育の役割は重い。国は、その責務として、義務教育の根幹（機会均等、水準確保、無償制）を保障し、国家・社会の存立基盤がいささかも揺らぐことのないようにしなければならない」（新しい時代の義務教育を創造する（答申）平成17年10月26日中央教育審議会）とし、教育の国際化に対する姿勢を示している。

そこでは、義務教育の構造改革として、この時期においてこそ、義務教育の構造改革が必要であるとしている。義務教育システムについて：

- ① 目標設定とその実現のための基盤整備を国の責任で行った上で、
- ② 市区町村・学校の権限と責任を拡大する分権改革を進めるとともに、
- ③ 教育の結果の検証を国の責任で行い、義務教育の質を保証する構造に改革すべきである、という確固とした理念が述べられている。

さらに、グローバル化を目指す現代社会の大きな変動は、学校教育に対しても大きな期待をよせている。そのためには、教員に対する信頼を確立し、「国際的にも教員の資質能力が高いものとなるようにすること」が求められる。

### ① 教職基礎体力を備えた教員とは

教員に求められる資質能力とはどのようなものであろう（図1参照）。

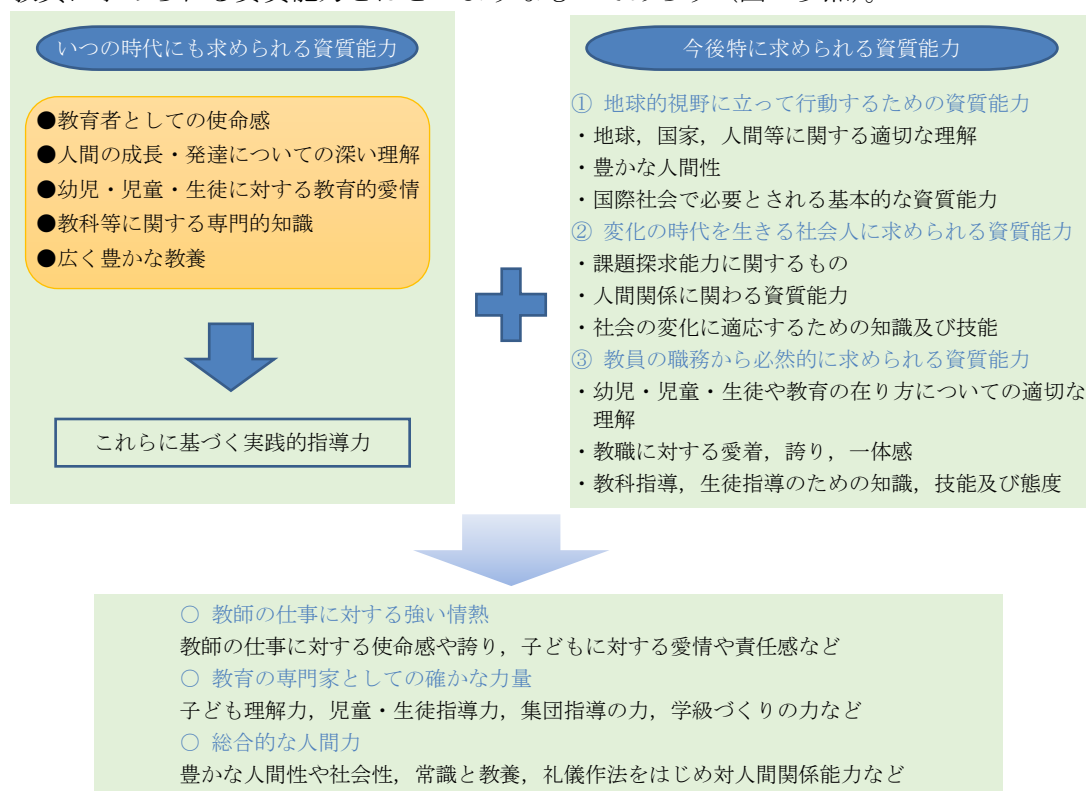


図1. 教員に求められる資質能力（文部科学省初等中等教育局教職員課「魅力ある教員を求めて」より抜粋）

- 1) いつの時代にも求められる資質能力：教育者としての使命感，人間の成長・発達についての理解，子供たちに対する教育的愛情，教科等に関する専門的知識，広く豊かな教養，これらを基盤とした実践的指導力等があげられる。
- 2) 今後特に求められる資質能力：地球，国家，人間等に関する適切な理解，豊かな人間性，国際社会で必要とされる基本的資質能力等の「地球的視野」に立って行動するための資質能力，さらに，課題探求能力等に関わるもの，人間関係に関わるもの，社会の変化に適応するための知識及び技術等の「変化の時代」を生きる社会人に求められる資質能力，そして，子供たちの教育の在り方に関する適切な理解，教職に対する愛着，誇り，一体感，教科指導，生徒指導等のための知識，技能及び態度等を含めた職務から必然的に求められる資質能力があげられる。

画一的な教員像を求めることは避け，生涯にわたり資質能力の向上を図るという前提に立って，全教員に共通に求められる基礎的・基本的な資質能力を確保するとともに，積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長を図ることが大切であろう。

これらを集約すると，以下の3つの要素があげられる。

- ・教職に対する強い情熱：教師の仕事に対する使命感や誇り，子どもに対する愛情や責任感など。
- ・教育の専門家としての確かな力量：子ども理解力，児童・生徒指導力，集団指導の力，学級づくりの力，学習指導・授業づくりの力，教材解釈の力など。
- ・総合的な人間力：豊かな人間性や社会性，常識と教養，礼儀作法をはじめ対人関係能力，コミュニケーション能力などの人格的資質，教職員全体と同僚として協力していくこと。

事例については，地域および校種に応じて多少の違いはあるが，これからの社会の進展や，学校教育に対する期待等を考慮した場合，文部科学省が示した基本的な考え方は，今後とも尊重していくことが適当であろう。一刻一刻と変化していく時代だからこそ，変化に柔軟に対応できる教育活動を行っていく上で，上述の資質能力を確実に身に付けることの重要性が喫緊の課題であると捉える。

また，教職は，日々変化する子どもの教育に携わり，子どもの可能性を開く創造的な職業であり，このため，教員には，常に研究と修養に努め，専門性の向上を図ることが求められている。教員を取り巻く社会状況が急速に変化し，学校教育が抱える課題も複雑・多様化する現在，教員には，不断に最新の専門的知識や指導技術等を身に付けていくことが重要となっており，「学びの精神」がこれまで以上に強く求められている。

## ② 国際感覚に優れた教員とは

文部科学省によると，「グローバル化」において，情報通信技術の進展，交通手段の発達による移動の容易化，市場の国際的な開放等により，人，物資，情報の国際的移動が活性化して，様々な分野で「国境」の意義があいまいになるとともに，各国が相互に依存し，他国や国際社会の動向を無視できなくなっている現象ととらえることができるという状況を主課題としており，特に「知」はもともと容易に国境を越えるものであることから，グローバル化は教育と密接な関わりをもつとしている。さらに「国際化」はグローバル化に対応していく過程ととらえることができる。教育分野では，諸外国との教育交流，外国人材の受入れ，

グローバル化に対応できる人材の養成などの形で、国際化が進展している。

グローバル化の進展とともに、政策上の課題や社会問題に対する対応策は政府によるものよりも市場原理に任せた方がよいとする動きも広がった。これにより市場開放と自由貿易が進展し、競争主義が浸透するとともに、小さな政府や地方分権が指向されるようになった。我が国では、教育分野において、高等教育における評価に基づく競争主義的施策が導入されたのに続き、初等中等教育分野においても評価の導入が進んできている。また、初等中等教育の行政面において地方分権が進んだ。さらに高等教育においては、国立大学の法人化や競争的資金の拡充といった変化をもたらした。

知識基盤社会化やグローバル化は、アイディアなどの知識そのものや人材をめぐる国際競争を加速させるとともに、製造業等の海外移転による国内雇用の変化をもたらしている。また、異なる文化との共存や国際協力の必要性を増大させている。

さらに、事前規制社会から事後チェック社会への転換が行われており、社会経済の各分野での規制緩和や制度改革が進んでいる。これらを背景に進展している競争社会において、自己の能力を発揮し社会に貢献するためには、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である。しかも、知識・技能は、陳腐化しないよう常に更新する必要がある。生涯にわたって学ぶことが求められており、学校教育にはそのための重要な基盤づくりの役割も期待されている。

同時に、「共存・協力」も必要である。国や社会の間を情報や人材が行き交い、相互に密接・複雑に関連する中で、世界や我が国社会が持続可能な発展を遂げるためには、環境問題や少子・高齢化といった課題に協力しながら積極的に対応することが求められる。このような社会では、異文化を背景に持つ者や自然と共に生きることが出来る寛容な精神を涵養することが求められる。

また、グローバル化の中で、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共存していくためには、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重要になっている。

社会のグローバル化の進展に伴い、今後求められる英語能力として、学校の英語教員には TOEFL-iBT80 以上、教育再生実行本部成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言では、高等学校段階において TOEFL-iBT45 以上と具体的指標が明示されている。

グローバル人材とは「世界に通用する人間であると同時に、日本の良さも自覚した上で働くことのできる人材」である。「グローバル人材」の概念を簡潔に整理すると、概ね、以下のような要素となる。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

このほか、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等があげられる。

HATO プロジェクトは、社会変革に対応できる人材の育成を求める時代の要請に、連携による英知の結集という形で応えるため、平成 25 年 3 月に発足した。現代の教育課題に対して、各大学が先導的に進めてきた取り組みなどを 16 のプロジェクトにまとめ、連携・協



力しながら推進している。具体的には以下の2点である。

- ・HATO 4大学が連携し、「新たな学びを支える教員の養成と、学び続ける教員像の確立」という教員養成系大学共通の課題を解決へと導く。
- ・全国の教員養成系大学・学部とネットワークを構築し、教員養成のさらなるレベルアップを図る。

本事業は、グローバル人材の育成の観点から、教職基礎体力の向上及び英語のコミュニケーション能力向上を含む国際感覚の醸成のための教員養成システムの構築を目指している。授業を通して実践力を磨き、深い思考力を身につける教育を行いつつ、海外留学などの機会を提供することによって学生および附属学校教員が自身の進化に繋げていくことが必要である。単に社会の要求に応えるだけではなく、十分な専門性と広い教養と実行力・行動力を身につけられるように、より質の高いシステムを提供する。

HATO プロジェクトの連携においては、国際感覚に優れた教員養成のため TOEFL・TOEIC 等の外部テストの活用による学生の英語力評価の実施と、テスト結果に応じた個々の語学力向上に向けたサポート体制の整備に取り組んでいる。例えば、正課授業でも外国人講師の授業を充実させれば、聴く・話すを中心とした、使える英語のスキルアップを図ることができる。また、インターネット環境があれば、いつでも自分の好きな時間に好きな場所で英語を学ぶことができる e-learning 教材を導入して、学生の自律学習を支援することも重要と考える。

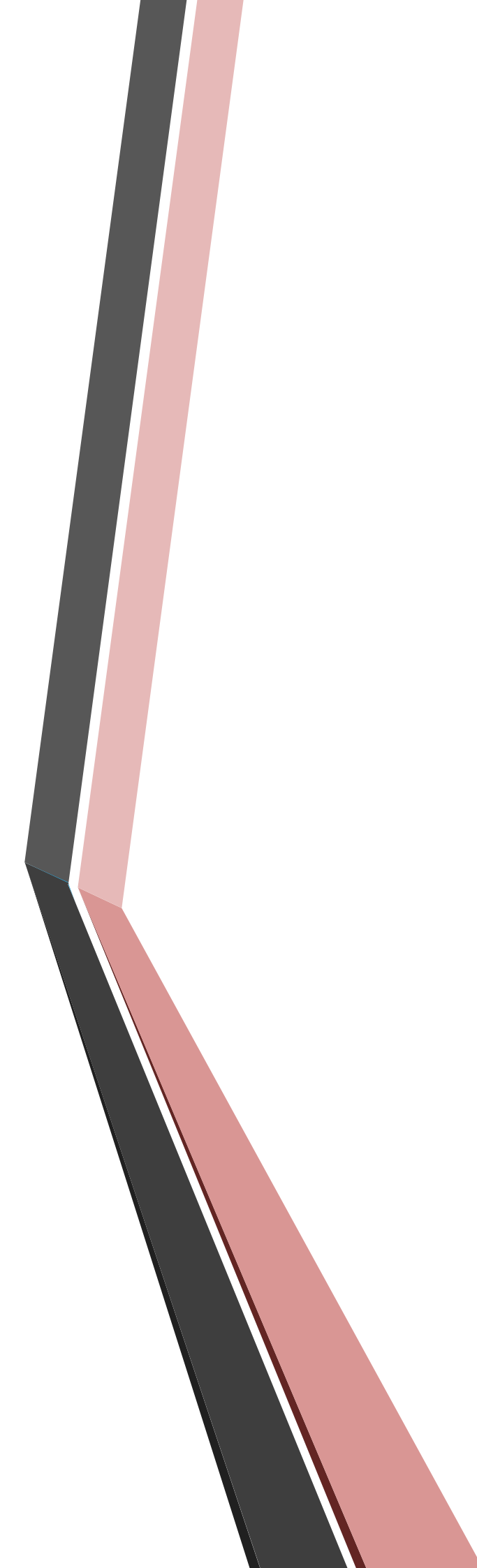
一方、大阪教育大学独自課題である教職基礎体力の向上としては、教育実習におけるパフォーマンステストの開発とそのシステム化を通じて、教育実習の更なる向上及び実習システムの改善による教職実践力の向上を目指す。

教育現場は、教員、保護者、地域との協力によって教育活動が成り立っており、コミュニケーション能力、他者との協働、地域社会の人々との交流が課題となっている。また、平成24年6月4日に発出されたグローバル人材育成推進会議審議まとめによると「外国語教育を担当する教員等の資質・能力の向上無くしてグローバル人材の育成はおぼつかない」と指摘されている。

このような状況のもと、教員養成大学として社会からの期待に応えるには、教職基礎体力を備え、かつ、国際感覚に優れた教員を養成することであり、そのためのプログラム開発は重要、かつ、喫緊な事業である。

文部科学省は、「教員の養成・研修における大学と教育委員会との連携が一層重要」であることを強調しており、本学の考え方とも一致するものである。





## 第2章

# 大阪教育大学に おける取組

- 1 大阪教育大学の英語外部試験の実施  
方策と質保証
  - 1－1 TOEFL-ITPに関して
  - 1－2 TOEFL-ITP分析結果
  - 1－3 Progress導入の背景と実施結果
- 2 大阪教育大学における外国語学習支援  
ルームの取組
- 3 大阪教育大学の地域における英語教育  
活動支援の取組

## 1-1 大阪教育大学の英語外部試験の実施方策と質保証 ーTOEFL-ITP に関してー

大阪教育大学 安部 文司

### 1. はじめに

大阪教育大学では、平成23年度から新入生全員に対し TOEFL-ITP (Level 2) テストを課している。これにより本学学生ほぼ全員の英語力を世界的に通用する尺度に照らして把握することができるようになった。また、入学者の英語力を入試方法や専攻別に把握することができ、個々の学生の英語力に応じたカリキュラム編成やクラス分けを行うことが可能となった。

大阪教育大学では、センター試験の英語（厳密には独，仏，中，韓を含む「外国語」だが、これまで英語以外を選択して入学してきた学生はいない）を受験して入学してくる学生の他に、センター試験の英語を受験せずに入学してくる学生がいる。入試の区分としては、一般入試とセンター試験を課す推薦の2つの募集区分が、センター試験の英語を受験して入学してくる学生になる。その他のセンター試験を課さない入試と第二部3年次編入で入学してくる学生、それに私費留学生在が、センター試験の英語を受験せずに入学してくる学生ということになる。

このうち、第二部3年次編入の学生は、他大学（時に大阪教育大学）や短期大学入学時にセンター試験を受験している学生もあり、また、すでに他大学や短大でいわゆる一般英語の教育を終えていて、大阪教育大学でも一般英語の受講を免除されることが多いのでここでは除外する。

### 2. これまでの問題点

さて、問題はセンター試験の英語を受験せずに入学してきた学生の英語力を知る方法がこれまでなかった、あるいはとってこなかった、ということである。

センター試験の英語を受験せずに入学してきた学生の中には、センター試験で英語を課されず、個別学力検査でも英語が課されなかったために、英語力がまったくなくても入学できた学生もある程度の数混じっていた。そのような学生に話を聞いてみると、中学1年で英語が始まったとたんに躓き、以降まったく英語がわからず、勉強もしないまま進級・進学してきている。高校・大学も実技による推薦のみで進学できたのである。彼らの中には、大学が受験で英語を課していないということは、入学してから英語は要らないことを大学側が示しているのではないか、なのになぜ入学したら英語が必修になっているのか、と不満を述べる学生もいた。

そのような英語力も英語を学ぶ意欲もまったくない学生がいる一方、高い英語力を持ち、中高の英語教師を目指したり、外資系企業や旅行業界などに就職しようとしたりする学生もあり、両方が同じクラスで同じ英語を学ぶということが起きていた。つまり同じ英語クラスの中で、受講学生の英語力と学習意欲に極端な差があったのだ。そのため、教える側も授業のレベル設定に苦心することになるし、どのレベルに設定しても、易しすぎて退屈している学生と、まったく理解できずに寝るかスマホをいじるかして時間を潰すだけの学生が一

つの教室の中に混在していた。

英語力がまったくない学生が混在していることは、別のかかなり深刻な問題を引き起こしていた。大阪教育大学では、平成 19 年度に CALL（コンピュータ支援語学学習システム）を導入した際、共通基礎科目の「英語 IIa」において、CALL を使って統一教材による統一授業をおこない、授業の最後に受講生全員に TOEFL-ITP (Level 1) テストの受験を課し、TOEFL-ITP (Level 1) テストの得点を主とした統一評価を導入した。これによって教員も学生も個々の学生の英語力を世界共通のモノサシで把握できるようになった。

ところが英語力がまったくない学生も受講しているために、せっかく TOEFL-ITP (Level 1) テストを導入しながら、そこに合格最低点を設けることができないでいた。なぜならどのような点数であっても、ある程度英語力が必要な得点を合格最低点に設定すると、いつまでも卒業できない学生が生じるからである。そのため、たとえ TOEFL-ITP (Level 1) テストの最低点である 310 点であっても、授業に出席し、平常点などに問題がなければ合格できるよう成績評価を設計せざるを得なかった。

TOEFL-ITP (Level 1) テストで最低点でも通るということは、明記していなくてもシラバスの「成績評価の基準」を注意深く読めば学生にはわかってしまう。その結果なにが起こったか。一部の学生は TOEFL-ITP テストをまじめに受験する気がなく、TOEFL-ITP テストが始まると、問題文にいっさい目もくれず、解答用紙の A から D まで 4 つあるマーク選択肢のうち、たとえば全問で B を塗りつぶしたり、あるいはマークシートで菱形や同心円などの図柄を描くようにマークを塗りつぶしたりして、残り時間を寝ている、ということが起こった。このような学生は当初は少数だったが、こういう態度は伝染するもので、英語 IIa の成績は「可」でよいと考える学生の間に広まっていった。ただ、おかげで、マークシートの同じ欄（B ならすべて B）を塗る方式をとると、たぶん 4 分の 1 は正答なのだろうが、360 点台の点数がつくということがわかった。

教員も当然このような問題は把握しており、改善策が検討された。また、大学からも学生の英語力向上と、その英語力向上を社会的に通用性のある外部テスト（まさに TOEFL-ITP テストが妥当する）で保証することを求められていた。

### 3. TOEFL-ITP を利用した対策

全員を対象にした TOEFL-ITP テストで合格最低点を設けられないほど事実上英語力がない学生がいるのであれば、彼らを、中学・高校と英語を学び、センター試験である程度の英語の得点を取って入学してきた学生と分ける。そして、彼ら英語力がない学生には中学校英語の復習から行うリメディアル・クラスを作り、最低限の英語力を身に付けさせる。そして、彼ら以外には、TOEFL-ITP (Level 1) テストで合格最低点を設け、それを下回る得点の学生には英語 IIa の単位を与えないことにする。

問題となったのはリメディアル・クラスで受け入れる学生をどう選び出すかという方法と、合格最低点を設けるとしたら何点が適当かであった。

当初、センター試験を課さない推薦で入学してきた学生の英語力を測る方法がなかったため、彼らをすべて英語力がない学生とみなし、リメディアル・クラスに入れることを考えた。しかし、センター試験を課さない推薦で入学してきた学生の中にもかなり高い英語力を持つ学生がいることが経験的にわかっていたし、ある入試区分の学生を、本人の希望を無視

してカテゴリーカルにリメディアル・クラスに入れてしまうのは問題だという指摘もあった。ちょうどそのころ HATO プロジェクトで TOEFL-ITP (Level 2) テストを新入生全員に課すことになり、これを利用することにした。入試課と教務課の協力を得て、柏原キャンパスに入学してきた 950 名ほどの新入生の英語力を調査した。センター試験を課さない推薦で入ってきた学生は、少数の高得点者を除けば、TOEFL-ITP (Level 2) テストでほとんどが 370 点未満だった。また、逆にセンター試験を課す入試（センター試験を課す推薦と一般入試）では、少数の低得点者を除けば、TOEFL-ITP (Level 2) テストでほとんどが 370 点以上を得点していた。そして、TOEFL-ITP (Level 2) テストで 370 点未満の低得点者はセンター試験の英語を受験していても、その得点がかなり低いことがわかった。

そこで、あくまでも本人の希望を尊重するという前提のもと、リメディアル・クラスに入ることを希望する学生を募集し、欧米言語文化講座（当時）の松本マスキ教授を中心に、TOEFL-ITP (Level 2) テストの得点で 370 点、またセンター試験の英語で 125 点（得点率 50%）を基準点としながら、簡単な英語テストと個人面談を元にリメディアル・クラスに入れる学生を決めていった。

リメディアル・クラス入りを希望しながら、英語力が高く、リメディアル・クラスに入る必要がないとして断った学生は別として、あくまでも本人の希望を優先することにしたため、TOEFL-ITP (Level 2) テストやセンター試験の英語の得点記録から判断すれば、英語力が低いのにリメディアル・クラスに応募してこなかった学生が少数ながら存在している。

リメディアル・クラスについては 1 年次、2 年次とも学生の入替えなく持ち上がることにし、2 年次での英語 IIa の TOEFL-ITP (Level 1) テストの受験を免除した。

他方、英語 IIa で TOEFL-ITP (Level 1) テストの合格最低点の設定はかなりの検討を要した。最低点としては 380 点から 400 点の間が妥当だということには異論はなかった。上述したように、たとえばすべて B をマークしても 360 点台が得られ、また Level 2 のテストではあるが 370 点未満を原則リメディアル・クラスに入れる基準にしているとすれば、2 年次で 370 点以下の点数を設定するのは無意味だろう。過去の TOEFL-ITP (Level 1) テストの結果から見て、本学学生の英語力からすれば、380 点が妥当ではないかという意見もあったが、380 点は大阪教育大学として学生の英語力を保証する基準にはあまりにも低すぎるという強い主張もあった。結局、TOEFL-ITP で 400 点がほぼ実用英語検定試験で 3 級程度に相当することを考えても、センター試験で英語を受験し、50%以上の点を取って入学してきた学生には 400 点はとても届かないような高すぎる目標ではなく、ある程度の努力でクリアできるはずだという判断もあった。また、大阪教育大学の学生としてせめてこの程度の英語力はほしいという願いもあった。そのような考えから 400 点に設定することにした。入学時のレベル 2 の得点で 370 点から 400 点の間にいる学生にとっては 400 点を超すように英語の勉強に励んでもらうことになる。これは教員の側もそれらの学生が 400 点を超えるよう支援することが求められていることも意味している。

#### 4. 効果

さて、TOEFL-ITP (Level 2) テストを新入生全員に課し、その結果も参考にしながらリメディアル・クラスを設けたり、TOEFL-ITP (Level 1) テストで 400 点のハードルを課したりした効果はどうだったのか。

TOEFL-ITP (Level 2)テスト導入の効果について、他にもさまざま変更したポイントがあるので、残念ながら導入前と導入後を厳密に比較できるデータはない。それでも、明らかにわかる変化があった。

たとえば、英語 IIa において TOEFL-ITP (Level 1)テストで 400 点というハードルを設けたために、400 点未満しか得点しなかった学生数が激減している。著者がセンター試験の英語と TOEFL-ITP (Level 1)テストの両方のデータを持っているのは 2011 年度時点の 2 回生のものだが、その年は教養学科だけ、かつ、センター試験を課さない推薦で入学してきた学生と留学生を除いても、対象学生の 2 割近い 70 人近くが 400 点未満しか得点していなかった（教員養成課程は 2011 年当時 TOEFL-ITP (Level 1)テストを課す英語 IIa が必修でなく、履修率は 2 割ほどだったので比較できない）。それが、TOEFL-ITP (Level 1)テストで 400 点というハードルを設けた 2015 年入学生が 2 回生になった 2016 年の教養学科英語 IIa の受講生では、センター試験を課さない推薦で入学してきた学生と留学生に近似的に相当するリメディアル・クラスの学生を除き、31 人までに減っている。

同様に、教養学科でセンター試験を課さない推薦で入学してきた学生と留学生を除いた平均点が 2011 年度 2 回生で 427 点なのになにしろ、近似的に相当する教養学科でリメディアル・クラスを受講することになった学生を除いた平均点が、2016 年度 2 回生で 444 点と、15 点以上伸びている。

また英語 IIa の授業をおこなっていても、これまでであれば「TOEFL さえ受ければ、最低点でも合格するんだから」というやる気のなさが受講態度に表れていた学生や、TOEFL-ITP テストの本番で上述のように適当にマークを塗りつぶして、あとは寝ているという学生はいなくなった。その分、授業や教員に対する要求も高くなっている。

## 5. まとめ

まとめるなら、HATO プロジェクトで新入生全員に TOEFL-ITP (Level 2)テストを課したことで、全員の英語能力を把握することができた。それによって英語力のない学生にはリメディアル・クラスを用意することができ、それ以外の学生には TOEFL-ITP (Level 1)テストで 400 点のハードルを課すことで最低限の英語力保証が可能となり、特にボーダー前後の学生が英語学習に真剣に取り組むようになって、英語力の底上げができたといえるだろう。

なお、2015 年入学生のセンター試験の英語成績、彼らの入学直後の TOEFL-ITP (Level 2)テストの成績、また彼らが 2 回生になって TOEFL-ITP (Level 1)テストを受験したときの成績については、本学情報処理センターの城戸楓特任助教が詳細な分析を行なっているので、そちらを参考にしていきたい。



## 1-2 大阪教育大学の英語外部試験の実施方策と質保証 ーTOEFL-ITP 分析結果ー

大阪教育大学 城戸 楓

TOEFL-ITP テストは、特定の団体内において行われる TOEFL テストである。本報告書では本学で行われた 2 度の TOEFL-ITP テストの結果から、本学において、学生の英語能力の上下や、その他の特徴について分析を行うことをこの報告書の目的とする。

### 1. 学生の英語力の経年変化 ～本学の英語教育の影響について

はじめに、学生の英語力が 1～2 回生間の大阪教育大学での教育によって、どのように変わったのかを明らかにするために、(1) 2015 年度新入生 TOEFL Level 2 (以下、TL2) の結果とセンター試験の英語得点 (以下、ES) との相関、および (2) 2016 年度 TOEFL Level 1 (以下、TL1) と ES との相関をそれぞれ算出した (Figure 1 a & b 参照)。TOEFL-ITP テストおよび、ES が学生の根本的な英語の能力を測定できているのであれば、受験時期がおおよそ同じ (1) では強い相関が見られるはずである。これに対して、大阪教育大学における英語の授業が学生の根本的な英語の能力に強く影響を与えているのであれば、TL1 が測定する英語能力は、大阪教育大学における英語教育を 1 年間受講した影響を受けており、ES との相関が弱まると考えられる。この分析では、ES、TL2、TL1 のいずれか一つでも欠損のある学生は分析から除外した。

ピアソンの積率相関係数分析の結果、ES×TL2 の相関係数は  $r = 0.59$  ( $t(811) = 20.86$ ,  $p < .01$ ), ES×TL1 の相関係数は  $r = 0.48$  ( $t(811) = 15.49$ ,  $p < .01$ ) であり、TL2 および TL1 のいずれにおいても、ES との相関が見られた。次に、TL1 から TL2 にかけて相関が変化したかどうかを検討するために、対応のある相関係数の相等性の検討を行なった結果、ES×TL2 に比べて、ES×TL1 の相関は有意に弱かった ( $z = 2.27$ ,  $p < .05$ )。このことから、**大阪教育大学に所属した一年間の大学生活が、入学した英語能力の変化に影響を与えている**ということが言える。

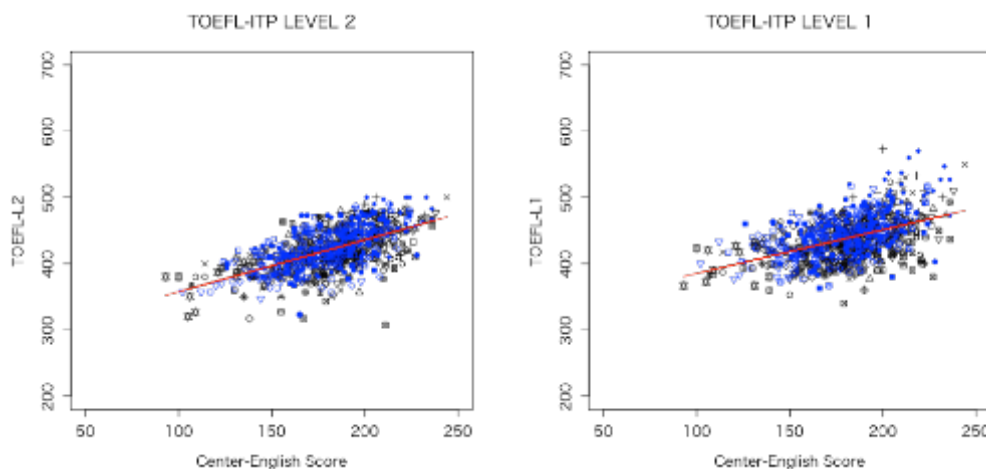


Figure 1 a & b: センター試験 (英語) と各 TOEFL テストとの散布図と回帰直線 (a: Level 2, b: Level 1)。プロットの各マーカー種は専攻を示す (凡例割愛)。またマーカーの色は教員養成課程 (黒) か教育協働学科 (青) であることを示す。



## 2. 英語教育による影響の検定

前項にて、大阪教育大学における英語教育が、学生の英語の能力そのものに影響を与えていることが明らかになったため、次に、これらの影響力の正負を検討するために、TL2 と TL1 の得点を t 検定によって比較した（スコアスケールによる違いを破棄するために、各テストの上限および下限の学生、およびいずれかのテストに参加していない学生は、分析から除外した）。この結果、TL1 の得点は、TL2 の得点よりも有意に高かった ( $t(1642)=10.83$ ,  $p<.01$ )。このことから、**本学における英語教育が、学生の英語能力に正（プラス）の影響を及ぼしている**ということが言える。

また、各セッションについてもプラスの影響があったかを確認するために、TL2 および TL1 の各セッションの得点を 3（セッション：聴解 or 文法 or 読解）×2（テスト：TL2 or TL1）の被験者内分散分析にて検討した。

この結果、両主効果が見られ（セッション： $F(2, 1654)=152.9$ ,  $p_{\eta}=0.15$ ,  $p<.01$ , テスト： $F(1, 827)=117.1$ ,  $p_{\eta}=0.12$ ,  $p<.01$ ），また交互作用があった（ $F(2, 1654)=4.65$ ,  $p_{\eta}=0.01$ ,  $p<.01$ ）。交互作用が見られたため、単純主効果の検定を行った結果、セッションの全ての条件において、テストの主効果が見られた（聴解： $F(1, 827)=52.3$ ,  $p_{\eta}=0.06$ ,  $p<.01$ , 文法： $F(1, 827)=50.0$ ,  $p_{\eta}=0.06$ ,  $p<.01$ , 読解： $F(1, 827)=6.6$ ,  $p_{\eta}=0.01$ ,  $p<.01$ ）。これらの結果は、**TOEFL テストのすべてのセッションにおいて、成績が上昇している**ことを示している。また多重比較（ボンフェローニ法,  $p<.05$ ）の結果、各セッションの得点は、TL2 時（入学時点）に聴解<文法<読解となり、本学の学生は、**聴解が最も苦手**で、**ついで文法が苦手**、**読解が最も得意**となっていることがわかる。ただし、TL1 時（2 回生時）では、聴解<文法＝読解となっており、**文法の成績がもっとも本学での教育の影響が大きかった**と言える。ただし、この文法の TL1 の成績は最も分散が大きく（Table 1 参照）、また TL2 と TL1 の差も大きくないことから、文法の成績が非常に上がった学生とそうでない学生の差が大きかった可能性を示唆している。

Table 1. TOEFL-ITP のスコアとセッションごとのスコア

|     | 総計スコア         | 聴解          | 文法          | 読解          |
|-----|---------------|-------------|-------------|-------------|
|     | Mean (SD)     | Mean (SD)   | Mean (SD)   | Mean (SD)   |
| TL2 | 421.6 (32.64) | 41.3 (2.84) | 42.4 (4.67) | 42.8 (4.57) |
| TL1 | 439.0 (33.73) | 43.9 (3.45) | 43.6 (5.13) | 44.1 (4.88) |

## 3. 本学に入学する学生の英語能力の特徴

次に、本学に入学した学生の英語能力の分散（ばらつき）を検討するために、英語センター試験の成績をプロットした（Figure 2 a～c 参照）。また、このとき、各セッションにおける、歪度と尖度を算出した（Table 2 参照）。この結果、本学合格者のスコアの標準偏差は、不合格者のスコアの標準偏差より低く、本学合格者のスコアのばらつきが小さいことを示している。また、合計得点、筆記試験、リスニングの全てにおいて、合格者では、歪度が-0.5 を下回っており、右寄りの分布になっていることを示している。また、筆記、リスニングでは、尖度も 1 を超えており（3 引き型尖度）、標準正規分布に比べて、狭い分布であることが示されており、このことから、**本学の入学試験では、より高得点のスコア範囲内から、ばらつきの少ない学生群が選出されている**ことを示している。

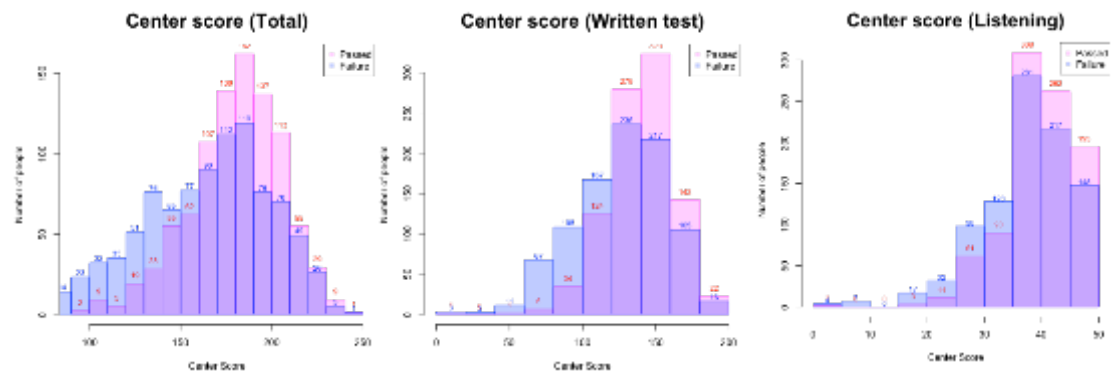


Figure 2. 大学センター試験（英語）スコアの実績 a) スコアの合計得点. b) 筆記試験の得点. c) リスニングの得点. 赤のバーは各得点範囲内の合格者の数を、青のバーは各得点範囲内の不合格者の数を示す。

Table 2. 大学センター試験(英語)スコアの記述統計量

|      |       | 平均    | 標準偏差(SD) | 歪度    | 尖度    |
|------|-------|-------|----------|-------|-------|
| 合格者  | 合計    | 175.2 | 25.22    | -0.50 | 0.26  |
|      | 筆記    | 136.3 | 22.30    | -0.61 | 1.58  |
|      | リスニング | 38.8  | 5.90     | -1.04 | 2.49  |
| 不合格者 | 合計    | 161.9 | 35.45    | -0.43 | -0.36 |
|      | 筆記    | 124.6 | 30.95    | -0.50 | 0.19  |
|      | リスニング | 37.2  | 7.83     | -1.16 | 2.33  |

\* 尖度は3引き型で算出

4. 専攻別での分析

まずはじめに、専攻ごとの TL2 および TL1 間でのスコアの差を図に示した (Figure 3 参照)。この結果、幼稚園教員養成課程、保健体育専攻、家政教育専攻、養護教諭養成課程以外の全ての専攻・コースにおいて、TL1 のほうが、TL2 よりも得点が高くなった。これらは、前述したように、大学入学後の教育によって、学生の英語力が向上した傾向を示している。

次に、各専攻での英語教育を比較するために、ES、TL2、TL1 および各セクションの得点を偏差値としてスコアして集計した (Table 3 参照)。偏差値の算出は本学の学生の中でのみ行った。この結果、欧米言語文化コースの得点が最も高く、ついで、英語教育専攻が高かった。また、英語の教育力の違いを明らかにするために、テスト間での偏差値の変化を、対応のある両側 t 検定によって比較した。この結果、幼稚園教員養成課程、国語教育専攻、養護教諭養成課程でスコアが有意傾向で下落 (有意傾向) し、保健体育専攻では有意に下落した。また、数理科学専攻、情報科学専攻にて有意傾向でスコアが上昇、社会科教育専攻、欧米文化言語コースでは有意に上昇した。これらの結果は、スコアが上昇している専攻では、より高い水準での英語教育が施されていること、下降している専攻では、英語教育に注力されていない可能性を示している。

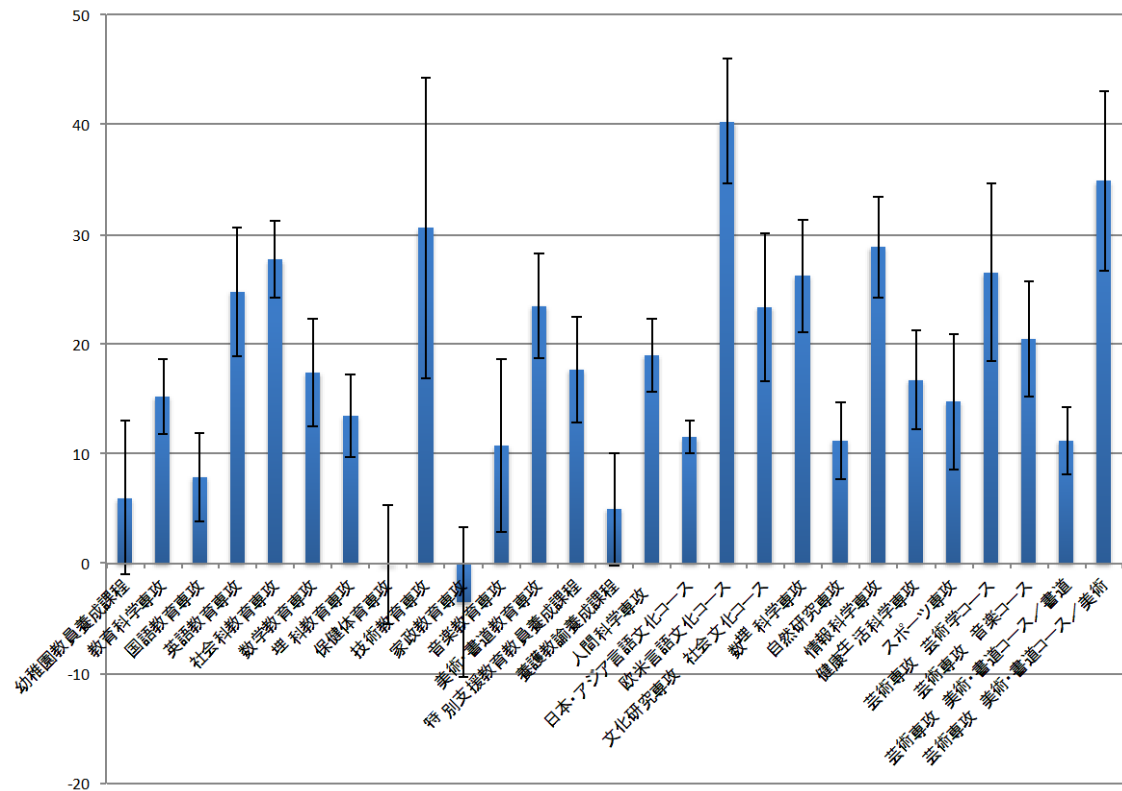


Figure 3: 各専攻の TL2 と TL1 の得点差。誤差棒は標準誤差を示す

Table 3. 専攻ごとの各テストおよびセクションのスコア(偏差値)

|                      | センター試験(英語) |       |       | TOEFL Level 2 |      |      |       | TOEFL Level1 |      |      |       | 有意差 |
|----------------------|------------|-------|-------|---------------|------|------|-------|--------------|------|------|-------|-----|
|                      | 筆記         | リスニング | 合計スコア | 聴解            | 文法   | 読解   | 合計スコア | 聴解           | 文法   | 読解   | 合計スコア |     |
| 幼稚園教員養成課程            | 56.0       | 55.7  | 56.5  | 52.6          | 55.7 | 53.2 | 54.9  | 51.9         | 49.5 | 52.0 | 51.4  | +   |
| 学校教育教員養成課程 教育科学専攻    | 53.1       | 52.3  | 53.2  | 48.8          | 50.1 | 51.0 | 50.2  | 49.2         | 49.0 | 50.7 | 49.5  |     |
| 学校教育教員養成課程 国語教育専攻    | 55.1       | 54.4  | 55.4  | 49.9          | 51.8 | 53.7 | 52.6  | 50.9         | 50.8 | 47.7 | 49.7  | +   |
| 学校教育教員養成課程 英語教育専攻    | 59.2       | 55.5  | 59.2  | 58.9          | 61.2 | 58.4 | 61.9  | 60.0         | 63.8 | 56.6 | 63.6  |     |
| 学校教育教員養成課程 社会科教育専攻   | 51.2       | 51.1  | 51.3  | 48.3          | 49.4 | 50.9 | 49.6  | 51.2         | 51.6 | 53.0 | 52.7  | *   |
| 学校教育教員養成課程 数学教育専攻    | 49.2       | 48.2  | 48.9  | 45.4          | 48.7 | 46.9 | 46.6  | 45.8         | 49.4 | 46.8 | 46.7  |     |
| 学校教育教員養成課程 理科教育専攻    | 52.9       | 51.2  | 52.8  | 49.6          | 52.2 | 49.5 | 50.7  | 49.9         | 48.6 | 50.5 | 49.5  |     |
| 学校教育教員養成課程 保健体育専攻    | 54.1       | 52.2  | 54.1  | 52.4          | 46.9 | 49.7 | 49.1  | 46.1         | 46.8 | 43.6 | 44.0  | *   |
| 学校教育教員養成課程 技術教育専攻    | 44.7       | 36.8  | 42.4  | 40.3          | 42.9 | 46.3 | 42.0  | 45.5         | 50.1 | 45.3 | 46.2  |     |
| 学校教育教員養成課程 家政教育専攻    | 49.2       | 50.2  | 49.4  | 52.5          | 48.1 | 48.0 | 48.9  | 48.2         | 45.3 | 41.2 | 42.7  | *   |
| 学校教育教員養成課程 音楽教育専攻    | 46.8       | 49.4  | 47.1  | 49.8          | 53.5 | 49.5 | 51.4  | 49.3         | 51.5 | 47.5 | 49.3  |     |
| 学校教育教員養成課程 美術・書道教育専攻 | 34.7       | 43.0  | 35.1  | 47.7          | 40.4 | 44.5 | 42.2  | 47.2         | 43.0 | 47.5 | 44.3  |     |
| 特別支援教育教員養成課程         | 46.6       | 49.1  | 46.8  | 47.3          | 47.5 | 44.5 | 45.4  | 46.7         | 47.7 | 45.8 | 45.7  |     |
| 養護教諭養成課程             | 52.8       | 49.8  | 52.4  | 53.3          | 49.4 | 48.2 | 49.9  | 49.4         | 44.0 | 48.9 | 46.2  | +   |
| 人間科学専攻               | 51.7       | 50.9  | 51.7  | 53.1          | 51.5 | 53.2 | 53.1  | 52.1         | 50.7 | 55.0 | 53.5  |     |
| 文化研究専攻 日本・アジア言語文化コース | 57.6       | 51.4  | 56.9  | 57.6          | 60.8 | 64.7 | 64.3  | 66.1         | 55.5 | 57.9 | 62.1  |     |
| 文化研究専攻 欧米言語文化コース     | 63.3       | 59.5  | 63.7  | 65.5          | 63.1 | 62.9 | 66.8  | 68.1         | 69.1 | 64.7 | 73.0  | **  |
| 文化研究専攻 社会文化コース       | 49.6       | 48.6  | 49.3  | 50.7          | 48.4 | 50.7 | 49.8  | 48.0         | 50.3 | 54.3 | 51.5  |     |
| 数理科学専攻               | 47.7       | 48.4  | 47.6  | 47.5          | 51.1 | 50.2 | 49.9  | 48.0         | 54.8 | 51.5 | 52.5  | +   |
| 自然科学専攻               | 49.5       | 51.2  | 49.8  | 50.7          | 51.0 | 51.4 | 51.3  | 47.6         | 49.9 | 50.8 | 49.5  |     |
| 情報科学専攻               | 44.5       | 42.2  | 43.4  | 44.7          | 48.9 | 45.9 | 46.0  | 49.3         | 48.8 | 50.9 | 49.6  | +   |
| 健康生活科学専攻             | 50.9       | 51.5  | 51.1  | 52.6          | 50.4 | 50.3 | 51.1  | 51.3         | 51.8 | 49.0 | 50.9  |     |
| スポーツ専攻               | 49.3       | 50.7  | 49.5  | 47.1          | 50.4 | 49.0 | 48.9  | 49.3         | 47.3 | 49.6 | 48.2  |     |
| 芸術専攻 芸術学コース          | 47.6       | 50.7  | 48.1  | 50.6          | 42.2 | 51.7 | 47.2  | 55.3         | 46.1 | 50.3 | 50.0  |     |
| 芸術専攻 音楽コース           | 41.9       | 43.3  | 41.5  | 48.7          | 45.3 | 44.7 | 44.9  | 48.7         | 46.1 | 46.8 | 46.0  |     |
| 芸術専攻 美術・書道コース/書道     | 31.4       | 36.7  | 30.8  | 41.1          | 37.9 | 42.5 | 38.1  | 47.8         | 36.2 | 38.6 | 36.7  |     |
| 芸術専攻 美術・書道コース/美術     | 46.7       | 48.8  | 46.8  | 51.6          | 46.9 | 50.6 | 49.2  | 55.7         | 53.0 | 52.0 | 54.4  |     |

\* スコアは全て本学内の得点に基づいた偏差値として算出しています(50が平均)

\* 有意差は、TL2とTL1の偏差値に有意に差があるかを示しています

## 5. センター試験未受験者の特徴分析

センター試験を受験せずに入学した学生について、その英語能力を検討するために、分析を行った。まずはじめに、センター受験を行った or 行っていない学生の TL2 の得点をヒストグラムにした (Figure 4 参照)。この結果、ヒストグラムのピーク (最も人数の多い点数区間) はセンター試験を受験した学生に比べて、していない学生が低い。また両群のスコアの比較について、ウェルチの t 検定を行った結果も同様に、**センター試験受験入学者のほうがそうでない学生に比べて TL2 のスコアが高かった** ( $t(998) = 10.16, p < .01$ )。

次に、入学形態ごとにスコアを分類し、TOEFL の各セクションでの比較を行った (Table 4 参照)。この比較には、被験者間 4 要因、被験者内 3 要因の 4 (入学形態：一般入学 or 推薦 or 3 年次編入 or 留学生)  $\times$  3 (セクション：聴解 or 文法 or 読解) の混合計画分散分析が用いられた。この結果、両主効果が有意 (入学形態： $F(3, 996) = 34.70, p \eta^2 = 0.09, p < .01$ , セクション： $F(2, 996) = 18.06, p \eta^2 = 0.02, p < .01$ ) で、交互作用が見られた ( $F(6, 1992) = 15.47, p \eta^2 = 0.04, p < .01$ )。このため、各セクションにおける入学形態についての単純主効果の検定を行った。この結果、全てのセクションにおいて、入学形態の主効果が有意であった (聴解： $F(3, 996) = 7.89, p \eta^2 = 0.02, p < .01$ , 文法： $F(3, 996) = 28.95, p \eta^2 = 0.08, p < .01$ , 読解： $F(3, 996) = 34.38, p \eta^2 = 0.09, p < .01$ )。このため、下位検定としてボンフェローニ法 ( $p < .05$ ) による多重比較を行った。この結果、聴解においては「一般入学＝留学生＞推薦＝3 年次編入」の順でスコアが高く、文法においては「一般入学＞留学生＝推薦＝3 年次編入」の順でスコアが高く、読解においては「一般入学＝留学生＞推薦＝3 年次編入」の順でスコアが高かった。これらの結果は、**TL2 の全てのセクションで一般入学は高スコアであったことに加えて、留学生では聴解のみ一般入学と同程度のスコアを獲得し、推薦、3 年次編入では全てのセクションでスコアが低かったことが指摘される。**

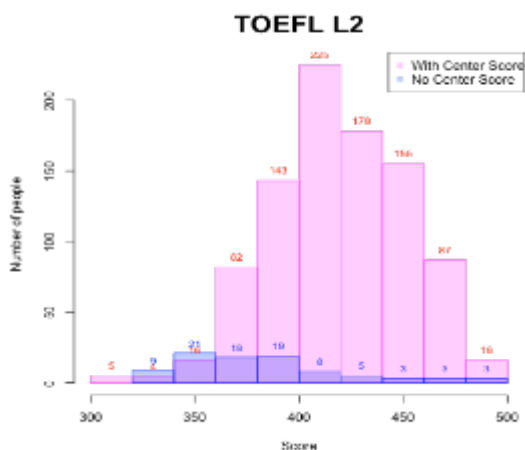


Figure 4. センター試験の受験分類での TOEFL Level2 の得点分布ヒストグラム

Table 4. 受験形態ごとの TOEFL Level2 各セクションのスコア

|       | 聴解   |      | 文法   |      | 読解   |      |
|-------|------|------|------|------|------|------|
|       | Mean | SD   | Mean | SD   | Mean | SD   |
| 一般入学  | 41.3 | 2.84 | 42.4 | 4.67 | 42.6 | 4.55 |
| 推薦    | 39.7 | 3.44 | 38.2 | 5.62 | 38.2 | 5.45 |
| 3年次編入 | 39.7 | 3.53 | 36.7 | 5.50 | 37.3 | 4.95 |
| 留学生   | 42.3 | 3.65 | 37.8 | 4.32 | 36.0 | 5.31 |

## 6. 推薦入試学生分析

本学では推薦入試において、センターを課す推薦と課さない推薦の2種別が存在する。よって、この項では、両試験の結果によって、TL2の成績に違いがあるかを検討した（Figure 5 参照）。この結果、センターを課す推薦を受けた学生では、450点を超える学生と420点未満の学生に二極分化し、センターを課さない学生では、2名をのぞいて全て、420点を下回っていた。

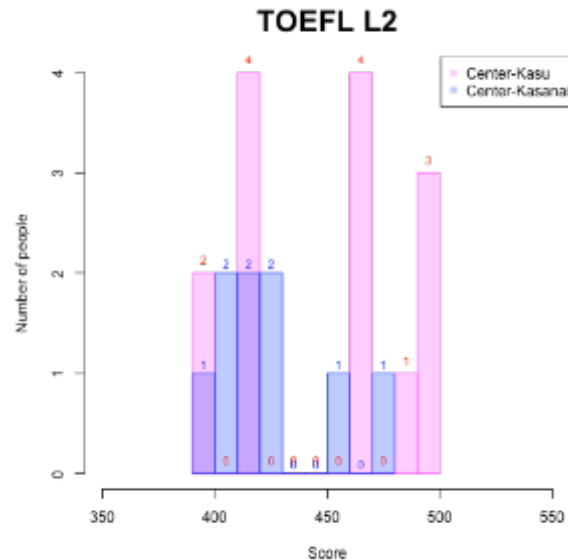


Figure 5. センターを課す推薦と課さない推薦の TOEFL Level2 の得点分布

## 7. 報告まとめ

TOEFL-ITP テストを実施することによって、以下のことが明らかにできた。

- (1) 大学での教育によって学生の英語スキルが向上している。
- (2) 英語スキルの中でも特に文法・読解のスキルが向上しているが、聴解のスキルは向上の度合いが低い。
- (3) 本学に入学してくる学生の英語スキルの分布を正確に知ることができる。
- (4) 専攻・コース別での英語教育への注力を推測することができる。
- (5) センターを受験していない学生の英語スキルを得点化することができる（報告書の 5, 6 項参照）

以上のことから、TOEFL-ITP テストを実施することによって、大学入学時の英語スキル、大学教育における英語スキルの向上（全体・専攻ごと）を数値指標として得ることができることが明らかになった。

こうした客観的な数値指標を得られたことによって、大学入学時の学生の英語スキルによってクラス分けなどを行い、より一人一人の能力に見合った適切な教育を施すことができるだけでなく、それぞれの専攻・コースでどの程度英語教育が効果を発揮しているのかを知ることができる。



### 1-3 大阪教育大学の英語外部試験の実施方策と質保証 —Progress 導入の背景と実施結果—

大阪教育大学 橋本 健一

本学ではグローバル化に対応できる教育人材の養成を全学的な目標としており、その達成に向けた取り組みとして、学生の外国語（主として英語）でのコミュニケーション能力を伸ばすための様々な取り組みを行っている。これらの取り組みによって学生の英語力がどの程度向上しているかを客観的に測定・把握することは、この種の取り組みにおいて極めて重要であり、本学においてもこれまで各種外部試験（Versant・TOEFL-ITP 等）などによる学生の英語力の測定が行われていた。しかしながらこれらの試験の実施は、それぞれの試験がターゲットとするスキルに関連する授業との連動で行われるいわば単発的なものであり、測定される言語スキルも限られたものである（例：Versant は主に speaking, TOEFL-ITP は listening と reading）などの課題が残されていた。英語能力の測定については、listening・reading・speaking・writing の4技能を測定する必要性が主張されるようになったこともあり、「4年間でどのような英語力をどの程度身につけさせるか」という英語教育のグランドデザインの再構築とPC必携化（後述）のタイミングにあわせて、英語の試験を内容・受験のタイミング等も含めて見直すこととなった。

このようなことを背景として、これまで本学において導入されてきた外部試験の内容や実施上のノウハウ、そして学生への受験費用負担等も考慮して、平成29年度より導入されたのが、Pearson 社が提供している英語運用能力試験「Progress」である。Progress は Reading, Grammar, and Vocabulary・Listening and Speaking・Writing の3つのセクションから構成されており、4技能+語彙・文法能力を総合的に測定する意図で開発された試験である。初心者レベルから母語話者に近いレベルまでの6レベルから1つを選択して受験することになっており、1回の試験時間は60分程度である。Progress は1IDの購入で3回の受験が可能であり、継続的に学習者の英語力の推移を把握するという目的に適している。

本学教員養成課程でProgressを導入することとなった1つの大きな要因がその受験環境である。同試験はインターネット上で行われて、ウェブブラウザ（Google Chrome 推奨）とネット環境さえあれば、いつでもどこでも受験が可能である。本学では平成29年度入学生からノートパソコンが必携となっており、この部分で連携ができれば、学生の個別受験から学内無線LANを用いた一斉受験まで様々な受験形態が想定できる。このような考え方に基づき、PC必携化を取り扱う情報処理センターとProgressの企画・運営を担当する英語教育講座に教務担当事務を交えて、Progress導入に向けた検討が開始された。平成28年度12月下旬には学生50人がそれぞれに受験用の端末を持参（あるいは大学から貸与）された状態での受験試行が実施されて、受験時間を一授業時間内におさめるための工夫の必要性や、PC・OSの違いにいかに対応するかなどの問題点が洗い出された。これらに対する対応を十全に検討した上で、平成29年度教員養成課程新入生からProgressを英語運用能力の継続測定を目的とした試験として導入することが決定された。

本稿執筆段階では平成29年度後期の一斉受験が終了したところであり、以下では本年度

の一斉受験がどのような形で行われたかの報告をする。受験対象となるのは教員養成課程平成29年度1年生522名で、受験期間は前期が5月29日から7月26日まで、後期が11月20日から1月26日であった。受験内容としては、本学第三期中期目標（英語の指導力向上に資する施策の展開を通じた、英語（中・高等学校）教員を目指す学生における英検準1級（あるいはTOEFL iBT80以上、TOEIC730点以上）取得率を平成32年度末時点で90%とする。）に基づき、英語教育コースの学生についてはLevel 3（CEFRでA2～B1レベル相当）、それ以外の学生についてはLevel 2（CEFRでA1～A2レベル相当）とした。受験の機会としては①自分のパソコンを用いて自宅等のプライベートネットワーク環境や学内無線環境で受験する、②指定された日時に集まって、学内無線環境下で試験監督の指示・補助の下で受験する、③学内PC教室のパソコンと有線ネットワーク環境下で受験する、の3パターンがオプションとして示された。

前期は未受験者3名を除く519名、後期は未受験者12名を除く510名が受験した。このうち、受験者の大半をしめる英語教育コース以外の学生の結果としては、全体の8割をこえる学生が指定されたレベルの中で最も低い点数しかとれておらず、この傾向は前期と後期で同じであることがわかった（Level 2の標準測定範囲（25点～40点）の下限以下の点数取得者の割合：前期86.8%・後期86.7%）。これは無論、受験者が英語の運用能力、すなわち実際のコミュニケーション内で使える英語力を有していないという側面がある一方で、受験者にとってまったく新しい形態でのテストであったこと、また高校を卒業したばかりでそもそもPCの取り扱いに不慣れであったということも原因として挙げられるだろう。他大学での先行実施例を見ても、第1回目・2回目については低い点数が出ていることが多いことがわかる。出題形式などについては、事前に資料を配布するなどできる限りの周知を行っているが、今後いわゆる「試験対策」とならない形で、Progressというテストが何を測ろうとしていて、本学の学生として受験することの意義とは何なのかを知らしめていき、より積極的な姿勢で受験するように導いていくことが必要と考えられる。

上記限界点を踏まえた上で、スキル別のスコアを見ると、リーディングのスコアが非常に悪いことがわかる（25点以下の割合：前期97.6%・後期96.3%）。一方で、一般的に日本人英語学習者が苦手とされているスピーキングとリスニングについては、下限以下の点数をとった学生の割合は低めであった（スピーキング：前期77.6%・後期78.6%、リスニング：前期82.7%・後期83.2%）。リーディングはProgressでは一番始めのセクションに配置されており、試験に十分入り込めていないが故の点数の低さである可能性もあるが、日本の英語教育が口頭コミュニケーションに重点を置いている影響であるとも考えられる。総合的なコミュニケーション能力の育成には、リーディングスキルのより一層の向上が求められる。

以上、教員養成課程で運用が開始されたProgressについて、導入の背景と平成29年度の実施結果について報告した。今後は浮かび上がってきた点を改善していくことで、さらに効率的かつ効果的な学内英語運用能力試験の実施、およびそこから浮かび上がる本学英語教育の不断の改善に取り組んでいく。

表 1. 前期結果（英語教育コース以外）

|        | 総合点 | リーディング | リスニング | スピーキング | ライティング | 語彙  | 文法  |
|--------|-----|--------|-------|--------|--------|-----|-----|
| 31点以上  | 15  | 4      | 21    | 34     | 5      | 9   | 36  |
| 26～30点 | 39  | 7      | 63    | 75     | 24     | 26  | 61  |
| 20～25点 | 207 | 55     | 167   | 151    | 101    | 103 | 133 |
| 20点未満  | 229 | 424    | 239   | 230    | 360    | 352 | 260 |

表 2. 後期結果（英語教育コース以外）

|        | 総合点 | リーディング | リスニング | スピーキング | ライティング | 語彙  | 文法  |
|--------|-----|--------|-------|--------|--------|-----|-----|
| 31点以上  | 17  | 5      | 22    | 49     | 10     | 15  | 44  |
| 26～30点 | 46  | 12     | 58    | 53     | 22     | 35  | 58  |
| 20～25点 | 165 | 48     | 122   | 112    | 103    | 102 | 105 |
| 20点未満  | 253 | 416    | 279   | 267    | 346    | 329 | 274 |



## 2 大阪教育大学における外国語学習支援ルームの取組

大阪教育大学 高田 恵子

大阪教育大学において平成26年10月に自律的な外国語学習支援を行うための組織として設けられた外国語学習支援ルーム（Global Learning Community: GLC）も開設より3年を迎え、取組も改良を重ねてきた。GLCを訪れる学生の幅も少しずつではあるが新入生や新規利用者に裾野を広げつつある。以下、本年度の取組を順に報告する。

### ➤ 取組実績

#### ● 利用状況

平成29年度前期 GLC 利用者状況（8月前半まで）

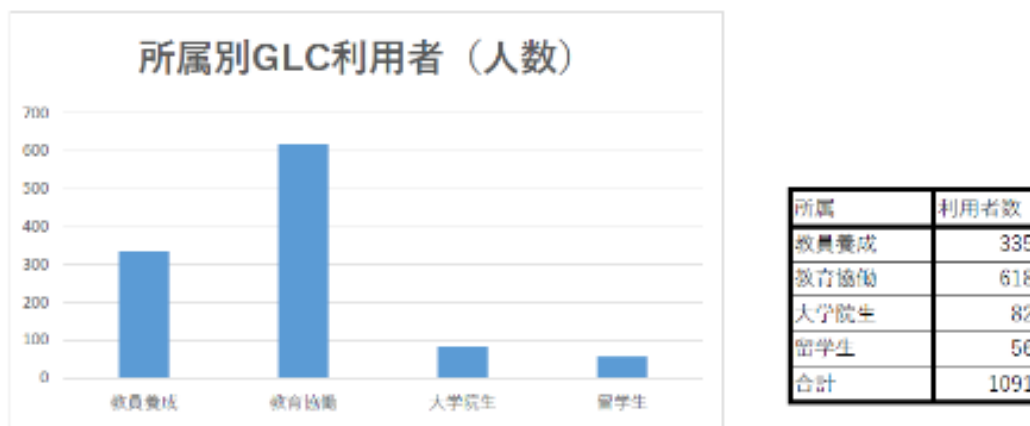


図1 所属別 GLC 利用者の人数

平成29年度 所属別GLC利用者（％）

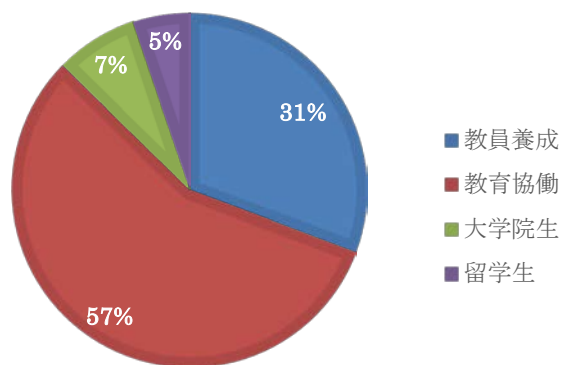


図2 所属別 GLC 利用者の割合

まず、最初に断っておかなければならないのは、来室時に利用者がこの来室データを入力するに当たって、今年度から新しく iPad で入力する方式で実施した。最初は利用者も前年度までの紙面での記載に代わり、変更になったので慣れるまで少し時間がかかったことと、日によっては学内のネット環境により、接続がうまくいかず入力できない等の不具合があった。そのため、実際の利用者人数は上記データより若干増えるということを断っておきたい。

平成 29 年度の前期 GLC 利用者の割合は、図 1, 2 が示すように、教員養成課程の学生が 335 名(31%)、教育協働学科の学生が 618 名(57%)、大学院生が 82 名(7%)、留学生が 56 名(5%)、合計 1091 名となっている。

図 1 や図 2 から、前期 GLC 利用者の割合は、教育協働学科の学生が教員養成課程の学生のおよそ倍の利用者数になっているということがわかる。このような利用者別の大きな差が生じた考えられる理由としては、教員養成課程の学生は、多岐にわたる専門分野や教科に分かれており、特に外国語や英語に興味の高い学生は、必然的に英語教育を専攻する学生であると考えられる。これらの学生は、基本的に英語が得意で既に自律してそれぞれの学習方法やスタイルを確立している学生が多いと推測される。そのため、教員養成課程の英語が得意な学生は「外国語学習支援ルーム」を利用する学生が少なく、教員養成課程全体として見た際の利用率の低さに繋がっていると考えられる。「支援ルーム」という名称により、教員養成課程の英語が得意な学生は、あえて足を運ぶ必要はないと捉えている可能性があると言えよう。また、後の各種プログラムの項目で詳述するが、前期に英語教育専攻で利用した学生は、留学をめざしている学生や、英語教員採用試験の面接対策という明確な目的を持って利用する学生が多かった。

それに対して、教育協働学科の学生では幅広くその専門分野が設定されているため、将来的に留学をめざすために、まず英語学習の方法について学習相談に来る学生が多かった。そして、留学についても教員養成の学生は、卒業後すぐに「教員になる」という目的がはっきりとしているため、卒業が遅れることに少し抵抗感を感じている学生も一定数いるようだったが、教育協働学科の学生は留学をすることで卒業が少し遅れることに対しても、より柔軟な捉え方をしている学生が比較的多く感じられた。

また、留学生の利用者データから、全体利用者数に対して日常的に GLC を利用する留学生利用者は少ない。今年度からは、主に留学生が使用する日本語能力試験 (JLPT) の書籍も新たに配置することになったので、そのような案内も含めてより一層留学生に対しても GLC の活用について周知していく必要がある。

### ● 来室者 (学年・所属別)

来室者を学年・所属別に見ると、一番多い学年と所属は教育協働学科 (2017 年度より教養学科から改組) 1 回生 298 人、その次に多いのが教養学科 2 回生 191 人、その次に教員養成 2 回生 182 人と続く。教員養成の学生に比べて、教養学科・教育協働学科の学生の利用者数が多いのが顕著である。

その一つの理由として、教養学科の学生が履修している授業の一つに、「多読」の授業があり、これらのクラスの前期の最初に、担当教員と学生が GLC に来室し、多読オリエンテーションを実施していることがあげられる。その授業では毎回多読をする課題が出されるので、前期後期通して必然的に GLC に配置している多読本を借りに来る学生が多かった。その結果、その後の教養学科における多読クラスの継続的な利用者に結びついていないのではないかと推測される。

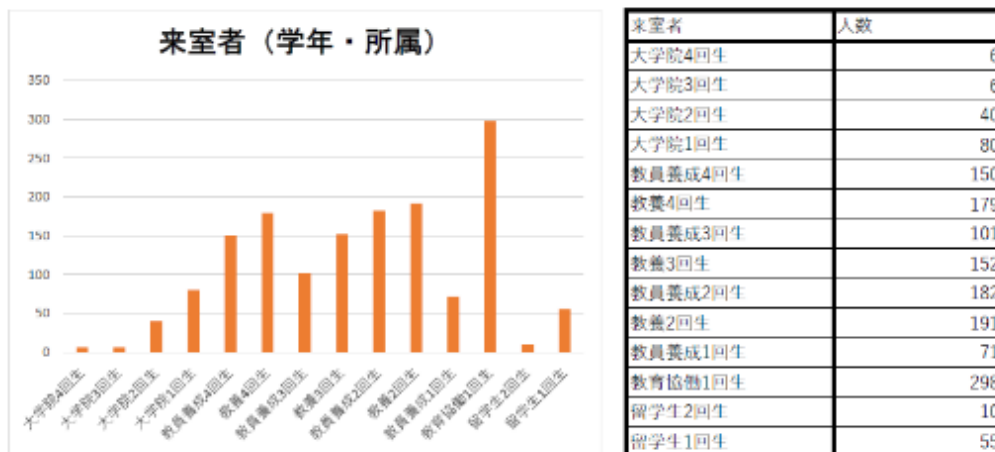


図3 来室者（学年・所属別）

### ● 来室目的

#### 平成29年4月から12月までのGLC利用者来室目的について

GLC来室の主な目的は図4のとおり、「図書の貸出・返却・延長」が825人で、一番多かった。その次の利用目的として多かったのが「留学生による英会話チャット」の222人で、ネイティブ教員との英会話チャットの106人と合わせると328人が英会話チャットを目的としてGLCを利用した。

今年度はGLCの体制と担当教員も変わり、5月頃から英会話チャットが開始できるようになったため、新体制での英会話チャットが学生の間に定着するまで時間を要した。図書の貸出・返却は前年度通り引き続き利用可能だったが、毎日ランチタイムに実施した留学生による英会話チャットと週1回のネイティブ教員による英会話チャットが軌道に乗り始めたのは、前期後半くらいからであった。後期開始時点では、一定数英会話チャットの利用者数も安定してきた。後期後半になると1回生や新規利用者が継続して英会話チャットを利用している姿が多く見られるようになってきた。

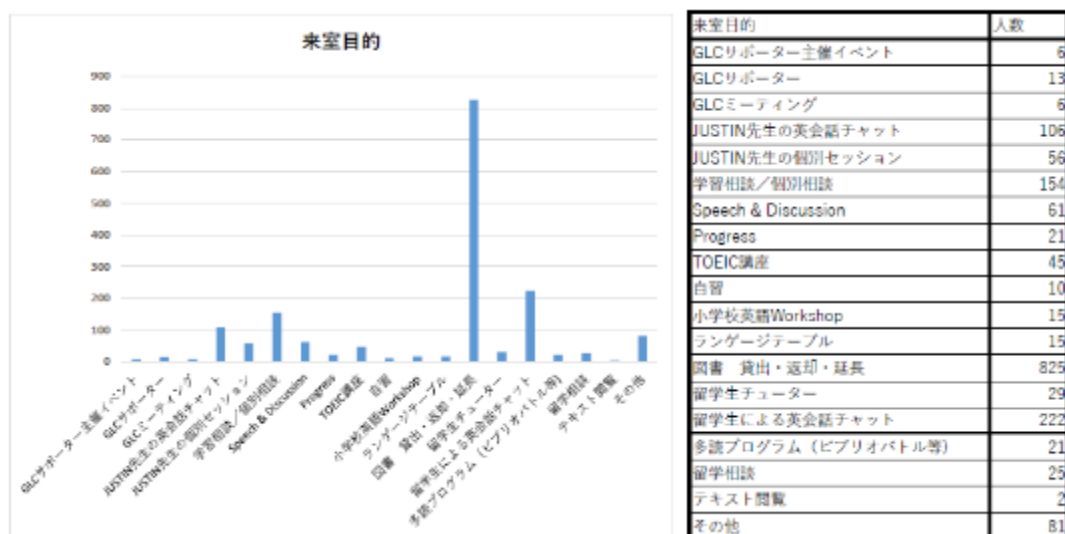


図4 来室目的

### ● 来室時間

GLC に来室する利用者が最も多かった時間は、12時から13時で、473名であった。その次に利用者が多かった時間帯は、14時から15時、次いで16時から17時であった。これらの来室時間帯データから、GLC を利用しやすい時間帯は、お昼のランチタイムの時間帯であるということがわかる。

現在、月曜日から金曜日までネイティブ教員または留学生による英会話チャットを実施しており、後期は前期より利用者数も増えてきている。また、後期から教職員向けの英会話チャットも開催しており、一定の教職員が現在利用している。昼休憩という利用しやすい時間帯に設定したことで、学生だけでなく、教職員にも GLC を利用する機会を設けることができた。

図5の来室時間のデータから、GLCでの講座やプログラム、セミナーなどの企画をするときには、これらの時間帯にできるだけ実施することで、より多くの参加者を見込める可能性があるといえる。

来年度の課題として、教育実習等に関わる大学の必須のガイダンスや行事の日程も事前に把握し、できるだけ重複しないように配慮する必要がある。セミナーや企画を行うにしても GLC 単独で実施するという訳ではなく、かなり入念に様々な方面の他部署とも連携をし、調整を行うことが重要になってくる。そのようなことがわかったことも、GLC として今年の大きな収穫であった。

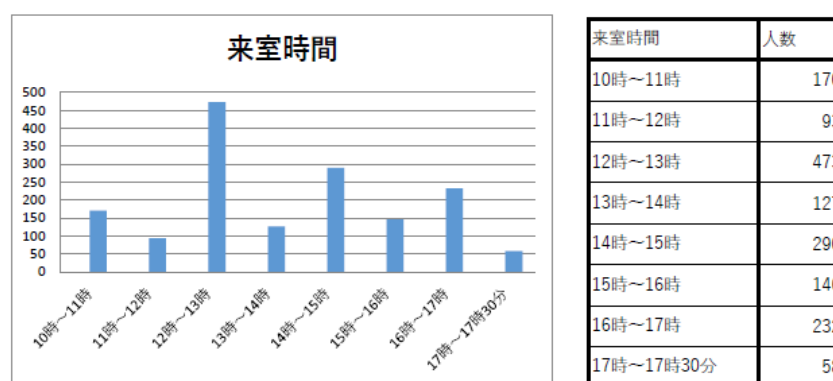


図5 来室時間

### ➤ 各種プログラム

#### ● 学習相談

学習相談利用者は154人で、主な相談内容としては、交換留学など留学に向けた各種英語外部試験のスコアアップのための具体的な学習方法、TOEFL® ITP, IELTS™, TOEIC®, 英検, 大学院入試対策などであった。ネイティブ教員の個別セッション(56人利用)では、主にスピーキングとライティングの対策とフィードバックを行った。

#### ● 英語4技能 Speaking・Writing・Reading・Listening の個別セッション

ネイティブ教員が主にスピーキングとライティングを担当し、日本人アドバイザーがリーディングとリスニングを担当した。スピーキングは、教員採用試験対策のスピーチや

集団討論の場面で、自分の意見が言えるようにするための練習や、各種英語外部試験の英語面接対策の練習などを行った。主な英語外部試験対策としては、IELTS<sup>TM</sup>、TOEFL<sup>®</sup>、英検である。英検に関しては、GLCでの個別セッションを利用して面接練習をした学生は、英語2次面接で全員合格した。リーディングに対しては、iPadを用いて速読の練習を行うアプリで1分間の英語を読む速さを測定（WPM: Words Per Minute）し、自主学習でもその練習を続けていくよう指南した。リスニングに関しては学習者それぞれのレベルに応じたリスニングができるポッドキャスト（インターネットラジオ）の紹介をして、継続的にリスニングをするよう学習計画を練った。

後期からは、学習相談の時間に詳細な学習計画表を作成して、学習者それぞれの目標に基づいてどのような学習計画が必要かを明確にすることで、学習者が自分の目標を常に意識してぶれずに学習に取り組めるよう支援した。

### ● チャットプログラム

（ランチタイム・アフタヌーンティータイム・各種外国語：中国語・フランス語・韓国語）

チャットプログラムは、GLCのプログラムの中でも一番利用しやすいプログラムであり、ネイティブ教員と留学生による英会話チャットを毎日月曜日から金曜日までランチタイム（12:15-12:45）に実施している。特に予約は必要なく、英語の話す力の向上をめざす学生や留学生と交流を持ちたい学生、英語試験のスピーキング力向上をめざす学生等、目的は様々であるが、チャットプログラムは現在GLCの主要なプログラムの一つである。前期は、ランチタイムに加え、午後のアフタヌーンティータイム（15:00頃）にも英会話チャットを実施した。

前年度との体制変更と入室管理システムの変更等で、チャットの利用者を増やしていくまで少し時間がかかったが、前期の後半から徐々にその利用者数は安定し始め、多い日には一回のランチタイムチャットに10人以上の参加者がいることもしばしば出てきた。話題に関しては、一つの方法としてトピックボックスという箱を設け、利用者に話してみたい話題を事前に紙に書いてもらい箱に入れておいたものを利用者が引き、その話題について話すという形式も活用した。話題については、その日のチャット担当者のやり方によってそれぞれ異なるので、トピックボックスを活用しても良いし、その日の利用者に合わせて柔軟にトピックを設定してもらった。

各種外国語チャットに関しては、前期にフランス語、中国語、後期に韓国語を実施した。これらのチャットも留学生GLCサポーターの協力のもと、短期（全4回程度）のスペシャルチャットという形で実施した。母国語を使って言語や文化を伝えた留学生にとって、大変良い経験となったとの振り返りが多数聞かれた。それぞれの言語や文化を学んだ参加者にとっても、双方にとって互いに深い学びとなったようだ。

しかしながら、今年度の新体制のもとでの反省点もあった。例えば、曜日によって、参加者数に差があり、チャットを担当する留学生と英語がよく話せる学生だけが盛り上がり、話についていけない参加者がいる場面もあった。このような状況を極力減らすためにも、レベルを優しいものに設定し、英語に苦手意識を持っている人でも参加しやすくする配慮が必要である。

また、トピックボックスを活用できたのだが、紙に書かれたトピックの難易度の差が大



きかったこともあり、今後は様々な英語運用能力の学生が来ることを想定し、「EASY」「HARD」など、トピックボックスの難易度によるレベルの分け方も検討する。

内容という点に関していうと、チャット内で簡単な英語のゲームに取り組んだクラスは、とても盛り上がっていたこともあり、時々英語を使ったゲームを通じて英語を学ぶという場面があっても良いかもしれない。

チャットを担当する留学生は、できるだけ参加者全員が一度は話せるよう話を振るなどの配慮があるとより参加者のモチベーションを上げることができるので、GLC サポーターの月1回のミーティングの中で、どんな風にチャットをすれば上手くいったかあるいは上手くいかなかったかを情報共有する場を設けるようにしたい。



【写真】英会話チャットの様子

#### ● Speech & Discussion Program（前期：教員採用試験英語面接対策）

前期は、教員採用試験の英語面接対策として、様々なテーマやトピックの英語教育内容に焦点を絞り、英語スピーチや集団討論の練習を重点的に行った。講師は、ネイティブと日本人のGLC ラーニング・アドバイザーと、語学教育部門のネイティブ教員と英語教育講座の日本人教員、そして附属学校課の指導参事の協力を得て、教員採用試験英語二次面接・模擬授業対策講座をキャリア支援センターと外国語学習支援ルームとの共催で実施した。現在話題になっている英語教育のトピックを扱い、グループで何度も英語でのスピーチや討論を重ねる実践形式で行った。

英語模擬授業直前対策では、指導参事からの指導のもとに、より具体的で実践に即した助言やフィードバックを受け、参加者は実際の教員採用試験に挑むことができた。

来年度の課題としては、より多くの教員採用試験の英語二次面接を受験する予定の学生にこのような対策講座があるということを周知し、学生が最大限に活用し自信を持って本番の試験に臨めるようキャリア支援センターと協力し、支援体制を整えていきたい。

実施の時期についても、キャリア支援センターの模擬授業対策に組込む形で、実施可能で最適な時期を模索し、検討していく必要がある。



図6 Speech & Discussion Program ポスター（前期）

### ● Speech & Discussion Program（後期：各種英語外部試験 Speaking 対策）

後期は、教員採用試験英語二次面接対策が終了した後、各種英語外部試験のスピーキング対策のための内容を扱った。具体的には、TOEFL®, IELTS™, 英検 1 級等のスピーキングセクションの過去問を用いて、それぞれの試験の実際の特徴の違いなどを踏まえて、参加者同士でスピーチや討論を行った。一言にスピーキングといっても、それぞれの試験に特徴や違いがあるため、できるだけ参加者の受験する予定の試験に近いものを取り扱った。

今年度は 2018 年 1 月 17 日に TOEIC®Speaking & Writing IP テストを実施予定で、来年度は参加者のニーズに合わせて TOEIC®Speaking & Writing のスピーキングセクションの内容についても徐々に取り扱っていく予定である。



図7 Speech & Discussion Program ポスター（後期）

### ● TOEIC®500 点講座

後期より、TOEIC® Listening & Reading の初級者向けのクラスを実施した。昨年度までは外部講師を招いて実施していたが、今年度は予算の関係もあり、GLC のラーニング・アドバイザーが講師となって全 6 回の講座として開講した。全 6 回の講座の後、TOEIC® Listening & Reading IP テストを任意で受験できる体制を整え、希望者には TOEIC®IP テストを受験できるようにした。

今回、この講座の目標スコアを検討するにあたって、毎月の語学教育部門の会議で本学の英語教育講座やグローバル教育



図8 TOEIC®講座ポスター



講座の先生方にも相談し、決定した。また、現在本学の大多数の学生の TOEIC® Listening & Reading の平均スコアがおよそ 480 点前後であるということと、より多くの英語学習初級の学生にも裾野を広げ、GLC を活用してもらいたいという願いから、TOEIC®初級クラスの開講に至った。

時々聞こえてくる「GLC は、英語上級者でないと来室しづらい」という固定概念を覆すためにも、このような英語初級者にも参加しやすい雰囲気づくりと英語初級講座等を開講して、今後も英語学習初級者の学生にももっと GLC を活用してもらえよう、支援していきたいと考えている。

### ● 小学校英語 Workshop（前期）

2020 年度からの小学校英語教科化も見据え、GLC での一つのプログラムとして位置づけ今年度から年間を通じて小学校英語ワークショップを開講することとなった。まず、前期に行った小学校英語ワークショップの内容について報告する。

前期の小学校英語ワークショップでは、テーマを 4 つに分け、小学校英語の教科化に向けて大阪府公立小学校英語学習 6 ヶ年プログラム教材『DREAM』を活用して短時間学習でできることに焦点を当て、それぞれ体験的にワークショップを行った。

- ① 【歌・チャンツ\*】小学校でよく使われる歌やチャンツを使って体験的に学ぶ。歌やチャンツを指導に用いる効用について
- ② 【絵本・ストーリー】ストーリー（お話）を通じて、やりとりや自己表現のフレーズをチャンク（意味のかたまり）で学ぶ。小学校英語活動に適している絵本やその効用について
- ③ 【アルファベット・文字指導】“教えない”文字指導とは？体験的に文字に親しみ、楽しく文字を学ぶ。アルファベットに親しむ活動を通じて、「いきなり書かせない」という視点をもつ
- ④ 【音・文字】アルファベットの音と文字をつなげる効果的な指導方法について学ぶ。フォニックスとは？フォニックスを学ぶ利点について知る。→自律した学習者を育てることに繋がる

\*チャンツ：日常的な話し言葉をリズムに乗せて表現したもので、「メロディーのない歌」「ことばあそび」のこと。

ワークショップに参加した学生からは、「紹介されたゲームには、楽しみながらもいろんなエッセンスが入っているので感動した。十分に音を聞いたり、形を見たりすることが重要だと分かった。（アルファベットを）line か curve で仲間分けする発想が新鮮だった」「フォニックスというと難しい感じがしていたが、今日学んだ方法だとスッと子どもたちに入っていくそうだなと思った。今後の参考にしたい」「普段から英語を学習している私たちにとっても難しく、楽しい活動だった。一つの活動でも、様々な導入があることを知った」等の感想が聞かれた。将来教員として小学校英語活動に携わる学生にとって、様々な活動を通じて体験的に学び、新たな視点から小学校英語活動について知る機会になったといえる。



図9 小学校英語 Workshop  
ポスター（前期）



【写真】絵本の読み聞かせ



【写真】アルファベットをペアで体現

### ● 小学校英語 Workshop（後期）

平成 27 年度より実施している HATO 事業の一環であるイングリッシュ・デイキャンプに向けて、毎年デイキャンプ直前の 2 日間で集中的に参加大学生対象の小学校英語ワークショップを実施してきた。昨年度までは、北海道教育大学、愛知教育大学、東京学芸大学、大阪教育大学の学生でイングリッシュ・デイキャンプを構成していたので、そのような日程での集中ワークショップであったが、今年度は HATO の最終年度のため、イングリッシュ・デイキャンプの参加大学生は本学の学生のみに限られ、今後も持続可能な小学校英語ワークショップとイングリッシュ・デイキャンプの新たな形を検討することとなった。

前期に引き続き、後期の小学校英語ワークショップは、地元柏原市などの 3 年生から 6 年生の小学生を対象として 12 月 2 日（土）に実施したイングリッシュ・デイキャンプを見据えてプログラムを開講した。中心となる講師は、小学校英語の授業を担当している本学の非常勤講師とネイティブの GLC ラーニング・アドバイザーが担当した。ワークショップには、将来小学校教員や英語科の教員をめざす学生を中心に 9 名が参加した。

具体的には、12 月 2 日（土）本番のイングリッシュ・デイキャンプに向けて、10 月 30 日（月）から計 6 回のワークショップを行い、小学校英語の理論と実践を体験的に学んだ。学ぶ柱は前期内容と同様だが、今回のイングリッシュ・デイキャンプの実施時期に合わせて「世界のクリスマス」をテーマとした。理論と実践を学んだあと、参加学生は、テーマに沿って活動内容を考え、指導案を作成し、模擬授業を行い、本番のイングリッシュ・デイキャンプに挑んだ。模擬授業に向けて、学生は GLC でのワークショップの時間以外にも積極的にチームで集まり、本番まで何度も練習を重ね、講師やアドバイザーから助言やフィードバックを受け、修正・改善を繰り返し、最終的な形に仕上げた。当日は、主に読み聞かせのストーリー班と工作を担当するクラフト班の二つの班で活動を展開した。



図 10 小学校英語 Workshop ポスター（後期）

### ● イングリッシュ・デイキャンプ

12月2日(土)、地元・柏原市などから集まった3年生から6年生の小学生を対象に、様々な外国語活動を通して英語に親しむイングリッシュ・デイキャンプを柏原キャンパスで開催した。この取り組みは、2020年度からの次期学習指導要領において小学校で英語が教科化されることを受けて、柏原市教育委員会の協力を得て実施しているもので、今年で3回目となる。HATOの最終年度ということもあり、今年度から大阪教育大学の学生のみでイングリッシュ・デイキャンプを実施していくことになった。そのような意味において、今年の小学校英語ワークショップとイングリッシュ・デイキャンプの形態は、例年までの形式とは異なり、今後HATO事業が終了した後もイングリッシュ・デイキャンプを継続していく際の本学独自のイングリッシュ・デイキャンプの在り方の一つのモデルとなるであろう。

当日のイングリッシュ・デイキャンプの進行については、教職をめざしている学生スタッフ9名と当日ボランティアの学生の3名が担当し、51名の小学生が参加した。今回は「世界のクリスマス」をテーマに、小学生を2つのグループに分け、歌やゲーム、クイズ、工作など、楽しく英語を学べるプログラムを実施した。具体的には、「SANTA」や「ジングル・ベル」をジュエチャーを交え踊りながら英語で歌ったり、世界各地のクリスマスの過ごし方をクイズ形式で紹介した。クイズでは、ロシアのクリスマスは1月7日であることや、メキシコのクリスマスが22日間もあることなどが出題されたり、クリスマスにちなんだ英語の絵本を読み聞かせる中で世界のクリスマスの様子や文化の違いなどにふれ、子どもたちは日本との違いに驚きながらも、さまざまな活動を通して楽しみながら英語で世界のクリスマスについて学ぶ機会となった。

参加した子どもたちからは、「世界にはいろいろなクリスマスがあることがわかった」「英語に対する考えが変わった」「いろいろな英語が覚えられてうれしかった」などの感想が聞かれた。事後の保護者アンケートからも今回のイングリッシュ・デイキャンプに関して高い満足度であったことが伺えた。具体的には、「娘がとても喜んで帰って来ました。工作もできたし、ここで知った世界のクリスマスのことを教えてくれました。いい経験になったようです」「とても楽しかったようなので、また是非参加できればと思います」といった感想が寄せられた。アンケートに協力してくれた保護者からは、「また参加させたい」との回答が100%得られた。

参加学生の修了レポートからは、「このキャンプで経験したこと、学んだことをしっかり自分のものにして次に進みたい。3回生で小学校英語教育の理論を学んだときに、この経験と理論を結びつけて考えられるようなキャンプであったと実感できるように、この経験を風化させないようにしたい」「このキャンプに参加できて本当に良かった。英語を楽しく学べる活動を通して英語を教える経験ができたことや英語で絵本の読み聞かせができたことなど、キャンプに参加して良かったことはたくさんあるが、中でも一番良かったのは、このキャンプに参加したメンバーに出会えたこと。キャンプを成功させるという1つの目標のためにみんなで協力して、キャンプを作り上げたことがとても良かった。そして、このキャンプに参加して他に良かったことはGLCに行きやすくなった」「このワークショップに参加し、長年嫌いで、苦痛に感じていた小学校英語が楽しいと感じることができるようになった。英語に対しての距離が近くなり、英語に対する意識も変わった。

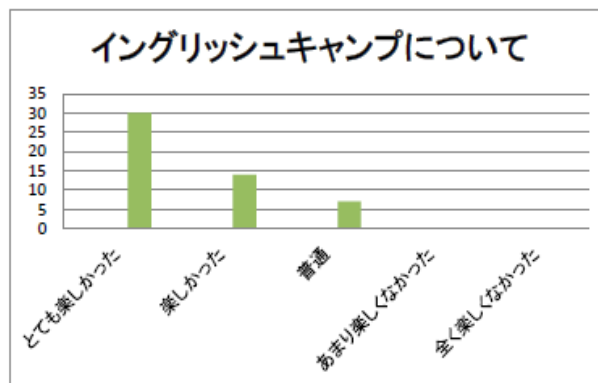
また、チームでお互い協力し、分担し、支え合う大切さや重要性を学んだ。この経験は教員の道を進んでいく上で、大きなものとなった」などの声が寄せられた。

参加学生にとって、教育実習以外でこういった実際に教える機会があるというのは、大変貴重な経験になるのではないだろうか。また、このようなプログラムを GLC で実施することにより、プログラム終了後も GLC を活用しやすくなり、GLC を活用した自律学習を促進する機会になることも GLC でワークショップなどを開催する大きな意義といえる。

参加学生を本学の学生に絞ったイングリッシュ・デイキャンプの今後の在り方については、それに連動するワークショップの時期や期間も含めて、2020 年の高学年での小学校英語教科化・中学年での小学校外国語活動導入を見据えて、今年度を参考にしながらより進化・改善したものへと発展させていきたい。

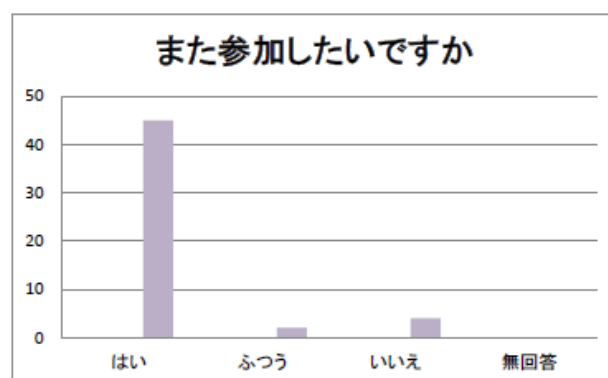
### 【イングリッシュ・デイキャンプアンケート結果】

#### ■ 小学生



| イングリッシュキャンプについて 人数 |    |
|--------------------|----|
| とても楽しかった           | 30 |
| 楽しかった              | 14 |
| 普通                 | 7  |
| あまり楽しなかった          | 0  |
| 全く楽しなかった           | 0  |
| 合計                 | 51 |

図 11 イングリッシュ・デイキャンプ



| また参加したいですか 人数 |    |
|---------------|----|
| はい            | 45 |
| ふつう           | 2  |
| いいえ           | 4  |
| 無回答           | 0  |
| 合計            | 51 |

図 12 イングリッシュ・デイキャンプ

■ 保護者

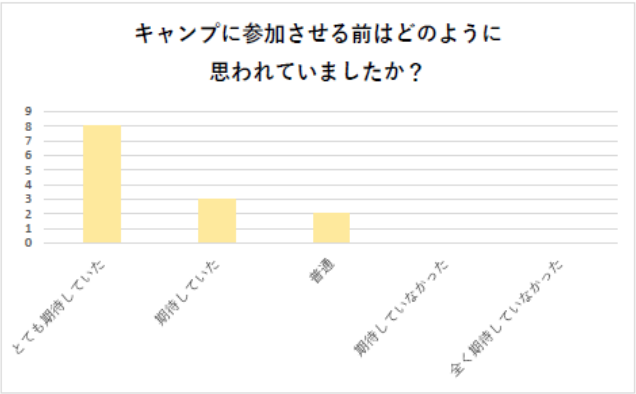


図 13 イングリッシュ・デイキャンプ

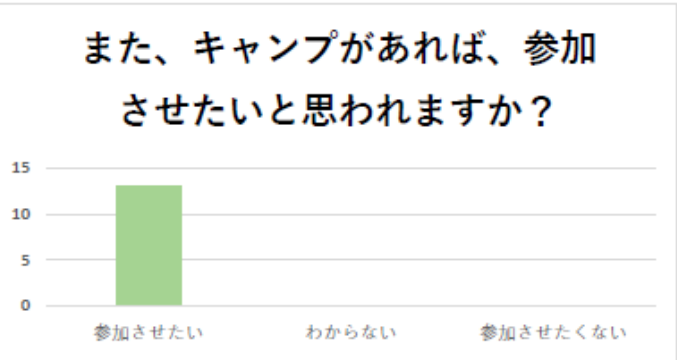


図 14 イングリッシュ・デイキャンプ

■ 大学生

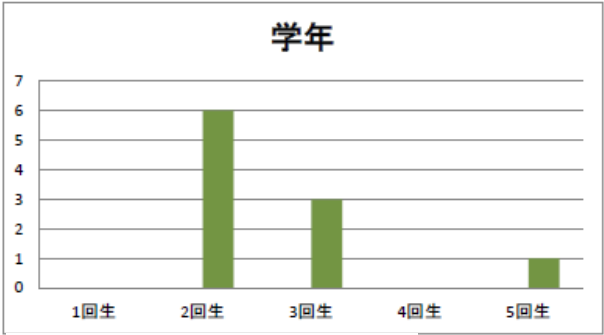


図 15 イングリッシュ・デイキャンプ

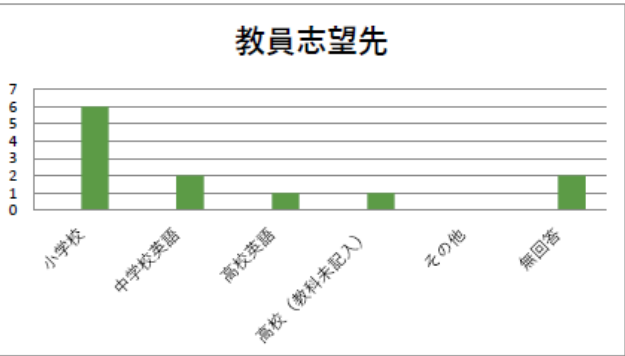


図 16 イングリッシュ・デイキャンプ

| 項目          | 人数 |
|-------------|----|
| とても期待していた   | 8  |
| 期待していた      | 3  |
| 普通          | 2  |
| 期待していなかった   | 0  |
| 全く期待していなかった | 0  |
| 合計          | 13 |

| 項目       | 人数 |
|----------|----|
| 参加させたい   | 13 |
| わからない    | 0  |
| 参加させたくない | 0  |
| 合計       | 13 |

| 学年  | 人数 |
|-----|----|
| 1年生 | 0  |
| 2年生 | 6  |
| 3年生 | 3  |
| 4年生 | 0  |
| 5年生 | 1  |
| 合計  | 10 |

| 校種        | 人数 |
|-----------|----|
| 小学校       | 6  |
| 中学校英語     | 2  |
| 高校英語      | 1  |
| 高校（教科未記入） | 1  |
| その他       | 0  |
| 無回答       | 2  |



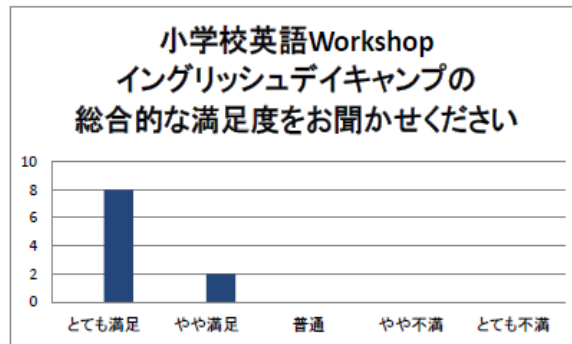


図 17 イングリッシュ・デイキャンプ

| 項目    | 人数 |
|-------|----|
| とても満足 | 8  |
| やや満足  | 2  |
| 普通    | 0  |
| やや不満  | 0  |
| とても不満 | 0  |
| 合計    | 10 |

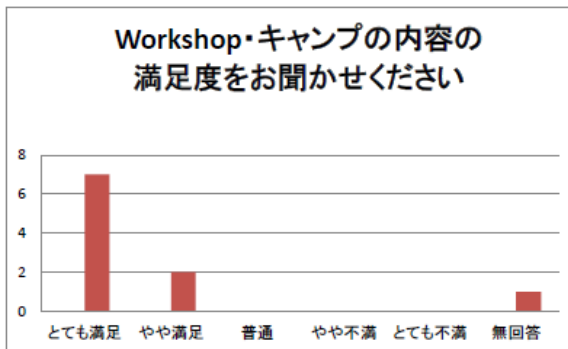


図 18 イングリッシュ・デイキャンプ

| 項目    | 人数 |
|-------|----|
| とても満足 | 7  |
| やや満足  | 2  |
| 普通    | 0  |
| やや不満  | 0  |
| とても不満 | 0  |
| 無回答   | 1  |
| 合計    | 10 |

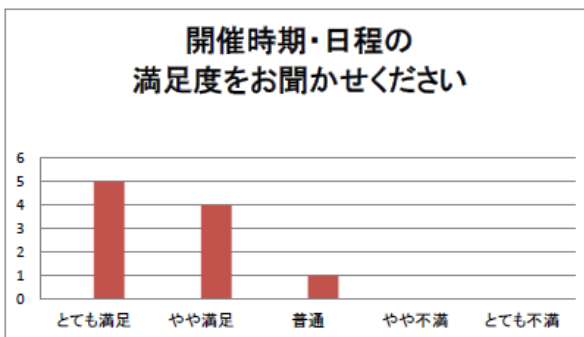


図 19 イングリッシュ・デイキャンプ

| 項目    | 人数 |
|-------|----|
| とても満足 | 5  |
| やや満足  | 4  |
| 普通    | 1  |
| やや不満  | 0  |
| とても不満 | 0  |
| 合計    | 10 |

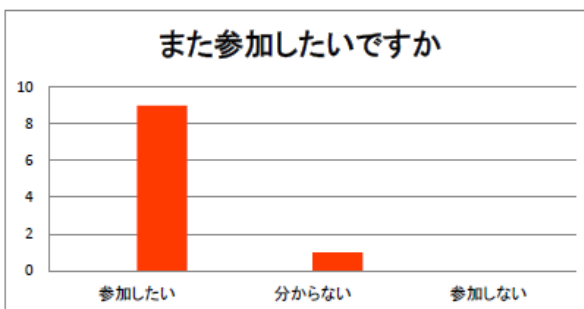


図 20 イングリッシュ・デイキャンプ

| 項目    | 人数 |
|-------|----|
| 参加したい | 9  |
| 分からない | 1  |
| 参加しない | 0  |
| 合計    | 10 |





【写真】イングリッシュ・デイクャンプの様子

図 21 イングリッシュ・デイクャンプ ポスター

## ➤ 自律的な外国語学習支援モデル

### ● 外国語学習教材の閲覧・貸出

平成 29 年 5 月から 12 月までの外国語学習教材の貸出状況と書籍の種類は、図 22 貸出書籍の種類からもわかるように、TOEIC®のテキストの貸出が一番多く（96 冊）、次いで TOEFL®, IELTS™がそれぞれ 64 冊で同冊となっている。その他、英検準 1 級（32 冊）や英検 2 級（27 冊）と続いている。

授業によっては、TOEIC®, TOEFL®, 英検などを授業の履修要件として掲げているクラスもあり、そのような授業を履修している学生がテキストを借りにくる傾向が見られた。また、今年度から日本語能力試験（JLPT）のテキストも配置したため、留学生で日本語能力試験を受験する学生も少しずつだがテキストを借りに來たり、GLC で学習する姿が見られた。

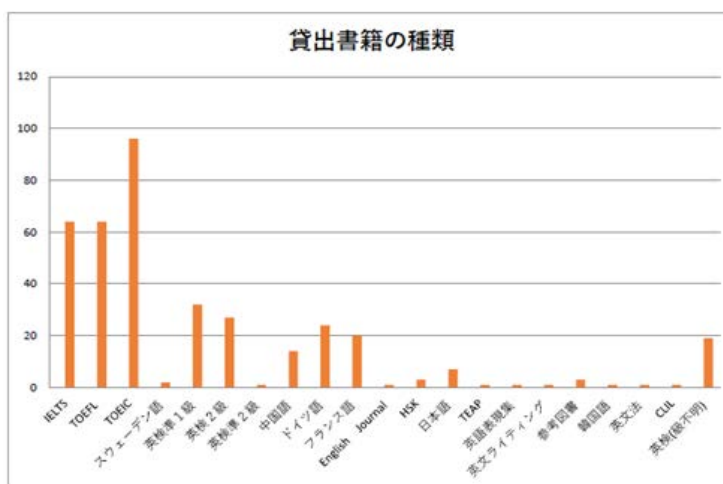


図 22 貸出書籍の種類

| 書籍の種類/月         | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 合計  |
|-----------------|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|-----|
| IELTS           | 6  | 5  | 1  | 15 | 3  | 22  | 6   | 6   | 64  |
| TOEFL           | 8  | 11 | 23 | 8  | 4  | 5   | 2   | 3   | 64  |
| TOEIC           | 9  | 21 | 18 | 10 | 2  | 20  | 11  | 5   | 96  |
| スウェーデン語         | 1  | 1  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 2   |
| 英検準1級           | 3  | 8  | 10 | 5  | 4  | 2   | 0   | 0   | 32  |
| 英検2級            | 5  | 6  | 8  | 0  | 0  | 8   | 0   | 0   | 27  |
| 英検準2級           | 1  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| 中国語             | 1  | 4  | 1  | 0  | 2  | 3   | 3   | 0   | 14  |
| ドイツ語            | 1  | 8  | 1  | 1  | 0  | 2   | 11  | 0   | 24  |
| フランス語           | 2  | 2  | 0  | 0  | 0  | 5   | 10  | 1   | 20  |
| English Journal | 0  | 1  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| HSK             | 0  | 0  | 1  | 0  | 0  | 0   | 2   | 0   | 3   |
| 日本語             | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 2   | 5   | 0   | 7   |
| TEAP            | 0  | 1  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| 英語表現集           | 0  | 1  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| 英文ライティング        | 0  | 1  | 0  | 0  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| 参考図書            | 0  | 1  | 0  | 0  | 2  | 0   | 0   | 0   | 3   |
| 韓国語             | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 1   | 0   | 0   | 1   |
| 英文法             | 0  | 0  | 0  | 1  | 0  | 0   | 0   | 0   | 1   |
| CLIL            | 0  | 0  | 0  | 0  | 0  | 0   | 1   | 0   | 1   |
| 英検(級不明)         | 0  | 0  | 1  | 0  | 0  | 11  | 6   | 1   | 19  |
| 合計              | 37 | 71 | 64 | 40 | 17 | 81  | 57  | 16  | 383 |

【表】貸出書籍の種類（月別）

学年・所属別で、一番利用者数が多かったのは、教養学科2回生(95名)だった。次いで多かったのは、教養学科3回生(47名)、教員養成4回生(40名)だった。図23 学年・所属別貸出利用状況より、教材の貸出状況では、教養学科・教育協働学科が全体的に多く、学年としては2回生が多いということがわかる。学習相談や留学相談にも、2回生くらいから相談にくる学生が多いので、2回生になった時点で留学を意識したり、授業での履修要件等も含めて、外国語学習を開始・継続する学生が多いということがいえる。

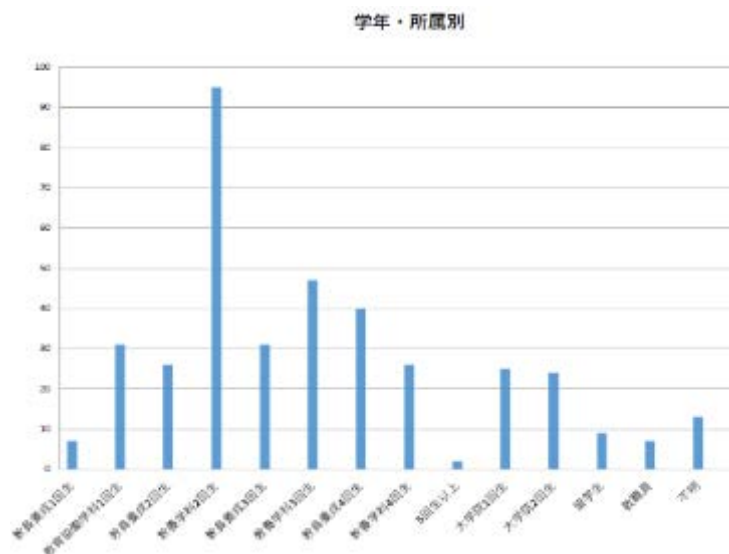


図23 学年・所属別貸出利用状況

| 書籍の種類<br>所属     | 教員養成<br>1年生 | 教員養成<br>1年生 | 教員養成<br>2年生 | 教員養成<br>2年生 | 教員養成<br>3年生 | 教員養成<br>3年生 | 教員養成<br>4年生 | 教員養成<br>4年生 | 5年生以上 | 大学院<br>1年生 | 大学院<br>2年生 | 留学生 | 教職員 | 不明 | 合計  |
|-----------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------|------------|------------|-----|-----|----|-----|
| IELTS           | 0           | 0           | 6           | 24          | 1           | 12          | 8           | 8           | 0     | 2          | 3          | 0   | 0   | 0  | 64  |
| TOEFL           | 0           | 6           | 9           | 26          | 5           | 0           | 11          | 0           | 0     | 3          | 1          | 0   | 0   | 3  | 64  |
| TOEIC           | 1           | 1           | 5           | 16          | 8           | 22          | 11          | 9           | 0     | 7          | 7          | 1   | 0   | 8  | 96  |
| スウェーデン語         | 0           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0     | 1          | 0          | 0   | 0   | 0  | 2   |
| 英検準1級           | 0           | 1           | 0           | 6           | 6           | 0           | 7           | 0           | 0     | 3          | 5          | 0   | 2   | 2  | 32  |
| 英検2級            | 0           | 0           | 5           | 2           | 4           | 0           | 0           | 2           | 2     | 0          | 3          | 4   | 5   | 0  | 27  |
| 英検準2級           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 中国語             | 1           | 4           | 0           | 5           | 0           | 0           | 0           | 4           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 14  |
| ドイツ語            | 2           | 11          | 0           | 4           | 0           | 4           | 0           | 0           | 0     | 3          | 0          | 0   | 0   | 0  | 24  |
| フランス語           | 3           | 7           | 0           | 8           | 1           | 1           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 20  |
| English Journal | 0           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| HSK             | 0           | 0           | 0           | 0           | 2           | 0           | 0           | 1           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 3   |
| 日本語             | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 3           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 4   | 0   | 0  | 7   |
| TEAP            | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 英語表現集           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 1          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 英文ライティング        | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 1          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 参考図書            | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 2          | 0   | 0   | 0  | 3   |
| 韓国語             | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 英文法             | 0           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| CLIL            | 0           | 0           | 1           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0           | 0     | 0          | 0          | 0   | 0   | 0  | 1   |
| 英検(級不明)         | 0           | 0           | 0           | 3           | 1           | 4           | 3           | 1           | 0     | 6          | 1          | 0   | 0   | 0  | 19  |
| 合計              | 7           | 31          | 26          | 95          | 31          | 47          | 40          | 26          | 2     | 25         | 24         | 9   | 7   | 13 | 383 |

【表】学年・所属別貸出利用状況

### ● 多読本の閲覧・貸出

外国語学習教材とともに、GLC では多読プログラムとして多読本の閲覧・貸出を行っている。YL とは、読みやすさレベルのことで、YL0 から YL6 までの多読本をレベル別に分けて配置し、音源のある多読本については同時に貸出ができるようになっている。



【写真】外国語学習教材・テキスト



【写真】多読本書籍

### ● ICT 教材を活用した自律学習

GLC では、ICT 教材を活用した自律学習を促進するために、iPad やポッドキャスト（無料インターネットラジオ）での効果的な学習方法を紹介・提案している。現在 15 台の iPad が GLC にあり、これらには各種外国語や外国語学習用の様々なアプリや多読用教材を常時活用できるよう環境を整備した。例えば、TOEIC®や英語技能に対応したお勧めのアプリなどを活用して、スマートフォンでの活用ができるものに関しては、学生が効率よく隙間時間に外国語学習ができるように、それぞれのニーズやレベルに合わせたものを紹介し自律学習への道筋を示している。スマートフォンを持っている学生は多いが、ポッドキャストなどを利用した外



【写真】iPad を活用した TED を用いたリスニングの様子

国語学習についてあまり知らない学生が多いことも、今回同時に見えてきた。そのような学生へ外国語学習に役立つポッドキャストの紹介や使い方のワークショップの実施も今後検討していく予定である。

## ➤ ワークショップ・セミナー

### ● IELTS™ Masterclass Webinar (JSAF-IELTS, IDP オーストラリア)

11月29日(水)に本学で初めて IELTS™ Masterclass のウェブセミナーを日本スタディ・アブロード・ファンデーション JSAF-IELTS と IDP オーストラリアの協力のもと開催した。これまで、TOEFL®の説明会は実施していたが、IELTS™に関する説明会は実施していなかった。しかしながら、近年の IELTS™受験者の増加に伴い、本学でも IELTS™に関するセミナーを実施することにした。当日は、オーストラリアと本学をウェブ上で繋いで、ウェビナーという形態で実施した。講師は IELTS™エキスパートのドン・オリバー氏が担当し、参加者は熱心にセミナーに耳を傾け、最後の質疑応答も活発に英語で行われた。内容もとてもわかりやすく、IELTS™の効果的なスコアアップの仕方や評価基準など、IELTS™受験者にとっては大変有益な情報を得ることができた。詳細については、以下のアンケート結果を参照されたい。



図 24 IELTS™ Masterclass Webinar ポスター

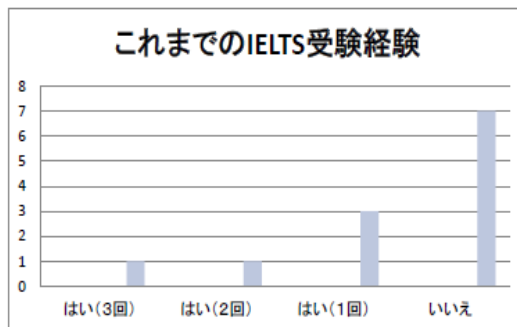


図 25 これまでの IELTS™ 受験経験

| ①これまでIELTSを受験されましたか。 | 人数 |
|----------------------|----|
| はい(3回)               | 1  |
| はい(2回)               | 1  |
| はい(1回)               | 3  |
| いいえ                  | 7  |
| 合計                   | 12 |

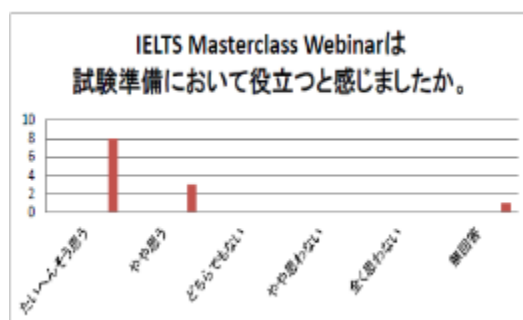


図 26 IELTS™ Masterclass Webinar は試験準備において役立つと感じるか

| ② IELTS Masterclass Webinarは試験準備において役立つと感じましたか。 | 人数 |
|-------------------------------------------------|----|
| たいへん役立つ                                         | 8  |
| やや役立つ                                           | 2  |
| どちらでもない                                         | 0  |
| やや悪くない                                          | 0  |
| 全く悪くない                                          | 0  |
| 無回答                                             | 1  |
| 合計                                              | 11 |



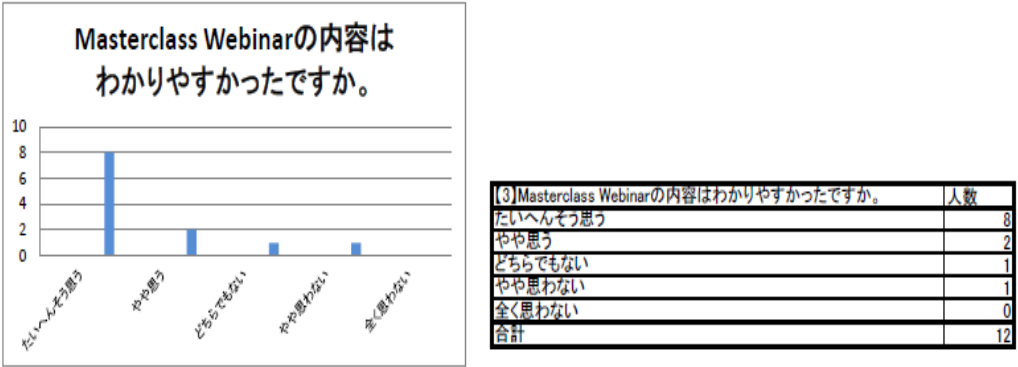


図 27 IELTS™ Masterclass Webinar のわかりやすさ

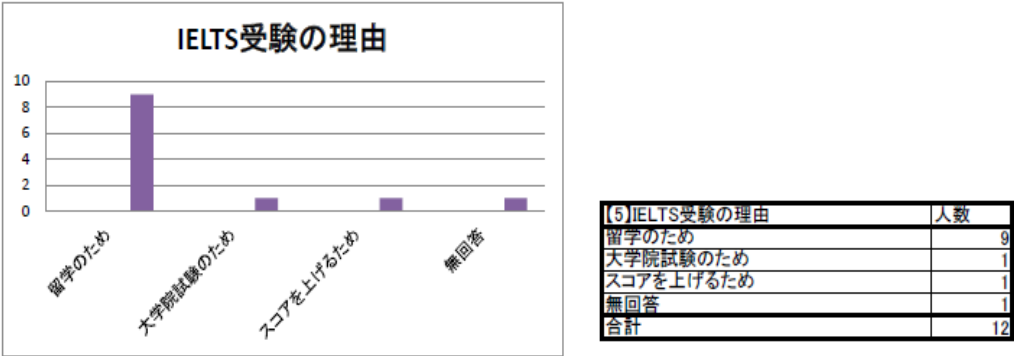


図 28 IELTS™受験の理由

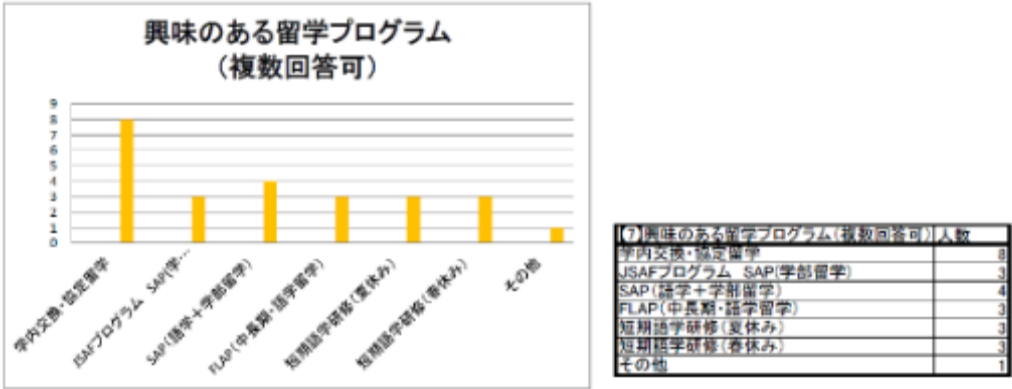


図 29 興味のある留学プログラム



【写真】 IELTS™ Masterclass Webinar の様子

➤ 外部テスト

● TOEIC® Listening & Reading IP・TOEIC® Speaking & Writing IP テスト

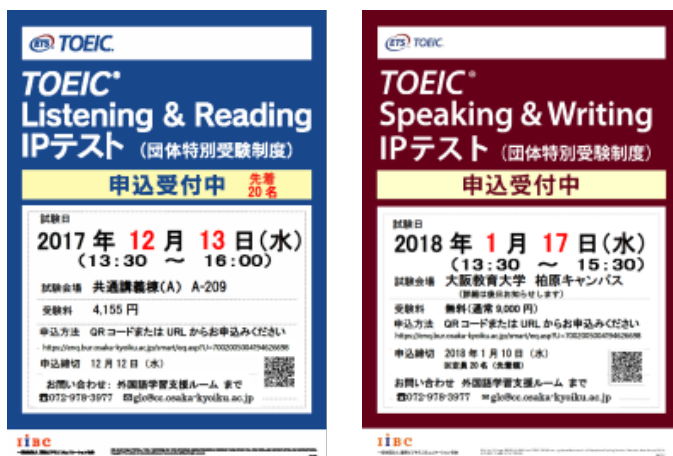


図 30 TOEIC® L&R と TOEIC® S&W ポスター

➤ 各種イベント

● SICEP: School Internship and Cultural Exchange Program

本学海外協定校の学生との日本文化交流・国際交流活動

このプログラムは、アメリカ・香港・フィンランドの本学の協定大学から、日本の教育や日本文化に関心のある学生を受入れ、近隣の小・中学校で観察実習を行い、児童・生徒との交流を体験することによって異文化理解力を高め、グローバルな視点を持つ人材の育成に寄与することを目的とする国際センター主催のプログラムである。プログラムでは、日本語や日本語学以外の専攻の学生でも参加できるように全て英語で実施し、日本人学生との交流もプログラムに取り入れている。この日本人学生との交流という点において、7月12日（水）に GLC サポーターが交流内容を企画し、日本の伝統の遊びである折り紙、福笑い、豆つかみや習字等の日本文化紹介や、和楽器サークル体験などを実施し、国際交流活動を行った。

<参加協定校・参加者数>

ノースカロライナ大学ウィルミントン校（アメリカ）： 3名

香港教育学院（香港／中国）： 5名

オーボ・アカデミー大学バーサ校（フィンランド）： 1名 計 9名







【写真】GLC サポーターとの  
SICEP 交流会の様子

### ● 国際交流プログラム

今年度、国際センター主催のもと GLC サポーターが協力する形で国際交流プログラムを3回実施した。第1弾はキルギスについて、キルギスからの留学生4名がパワーポイントで写真などを見せながら、キルギスの言語、面積、人口、位置、オスメの場所、伝統的な衣装について紹介し、文化の違いについて触れた。伝統的な衣装については、留学生がキルギスから持ってきた実物を身に付けて紹介した。また、日本とキルギスの金銭の価値の違いについて説明し、実際にキルギスで使われているお金を見せ、キルギスの交通費・給料について説明した。

第2弾は、教員研修生が担当ということで「海外×教育」というテーマで発表した。各国の基本的な情報や伝統的な文化に加えて、それぞれの出身国の教育や、先生としての自身の経験についても紹介してもらった。最後に交流会としてメキシコの伝統料理「チラキレス」を食べながら、参加者同士で交流を深めた。

第3弾は、季節の「ふゆ」をテーマに、各国の基本的な情報や伝統的な文化に加えてそれぞれの出身国の冬の過ごし方や特別なイベントについて紹介してもらった。第3弾では、日本についても発表し、日本の伝統のお正月や特別な食べ物についても紹介した。また、冬の過ごし方や特別なイベント、クリスマスや新年のイベント、お祭りについても紹介し合い、異文化について深く知る機会となった。最後に、ハンガリーの伝統菓子「コークスゴヨー」を食べながら、参加者同士で交流を深めた。どの国際交流プログラムでも、



図 31 国際交流プログラム ポスター

留学生は日本語で発表をして、日本人学生や他の留学生は普段はなかなか知ることのできない各国の文化や伝統について、互いに理解し合う良い交流となった。



【写真】国際交流プログラム

### ● 多読セミナー（ビブリオバトル準備サポート）

多読プログラムの一環として、英語リーディング力の向上と、GLC の多読教材や電子ブックの活用による外国語の自律学習支援モデルの構築を目標とし、附属図書館と GLC との共催で英語による知的書評合戦（ビブリオバトル）を開催した。

英語ビブリオバトル開催に際し、GLC では多読セミナーを実施し、個別による準備サポートを行った。具体的には、発表参加者のビブリオバトルに向けての英語原稿の構成の仕方、英語表現のチェックや聴衆に伝わる効果的なプレゼンテーションの方法など、発表参加者が自信を持ってビブリオバトルに参加できるように、当日までに一人当たり 4 回のサポートセッションを任意で活用できる体制を組んだ。サポートは、GLC ラーニング・アドバイザー（ネイティブ、日本人）、英語教育を専門とするネイティブの大学院生の GLC サポーターが担当した。

この多読セミナーを活用した学生からは、「ビブリオバトルに参加するにあたり、多くの方に英語を見てもらってとても勉強になった」と感想が寄せられた。当日のビブリオバトルに関する詳細については、次の「English ビブリオバトル」の項目に委ねる。

### ● English ビブリオバトル（知的書評合戦）（共催：附属図書館）

本の魅力を伝え合う知的書評合戦「(通称) ビブリオバトル」(共催：附属図書館・外国語学習支援ルーム)を 11 月 22 日(水)、柏原キャンパス附属図書館で開催した。英語での開催は、本学で初めてとなる。知的書評合戦は、もともとは良い本に出会える仕組みを勉強会の中に取り組めないか、と模索する中で京都大学で 2007 年に始まり、今やその取組は全国的な広がりを見せ、公立図書館や高校、大学でも開催され、首都圏大会や全国大学ビブリオバトルの大会なども開催されている。

今回、英語ビブリオバトルを開催するにあたり、附属図書館の協力のもと外国語学習支援ルームで行っている多読プログラムの活用や、外国語の自律学習支援モデルの構築をめざして実施した。発表参加者として、外国語学習支援ルームを日頃利用している学生 4 名、観覧者として学生、大学院生、教職員合わせて 26 名が参加した。

発表は、公式ルールに沿って 1 人あたり発表時間 5 分と質疑応答約 3 分で行い、発表者はお気に入りの一冊の本(洋書)について、工夫を凝らしながら、英語でその魅力を熱く語った。観覧者は発表後に英語で質問をし、最後に一番読みたいと思った本一冊に投票をして今回のチャンプ本(最も得票数の多く観覧者が読みたいと思った本)を決定した。

最も得票数が多かったのは、玉置萌さん(英語教育専攻 4 回生)の *Christmas in London* (Anita Hughes 著) で、ロンドンでのクリスマスの様子が描かれたストーリーが今回聴衆の心を最も魅了した一冊となった。チャンプ本に選ばれた玉置さんは「英語の本を読み始めるきっかけとなるととても良い機会だった。今後他の発表者の本を読むのが楽しみ。人前で英語を話す本当に良い機会だった。またぜひ参加したい」と感想を述べた。観覧者からは、「学生さんの英語がとても上手で、とても熱い思いがヒシヒシと伝わってきて、とても楽しかった」「緊張感があり、伝えたい思いが届いた」「リスニングの勉強になるし、本に興味を持てる！」などの感想が寄せられた。

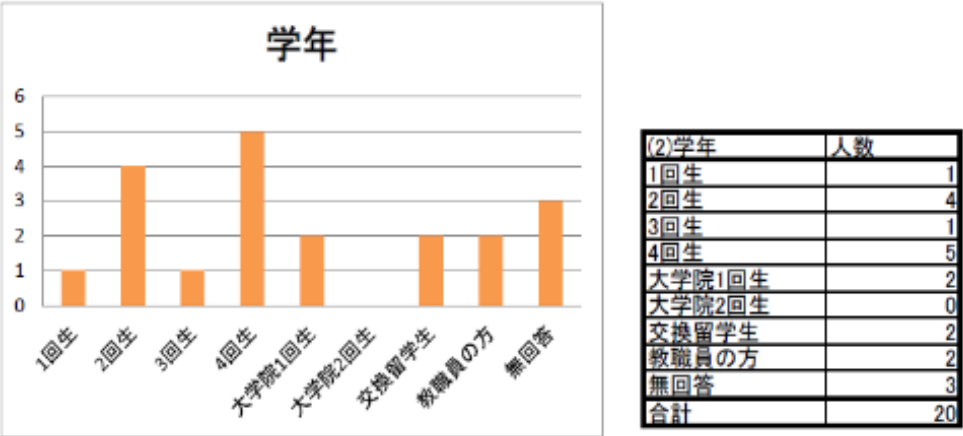


図 32 【English ビブリオバトル】参加学生の学年



図 33 【English ビブリオバトル】の総合的な満足度

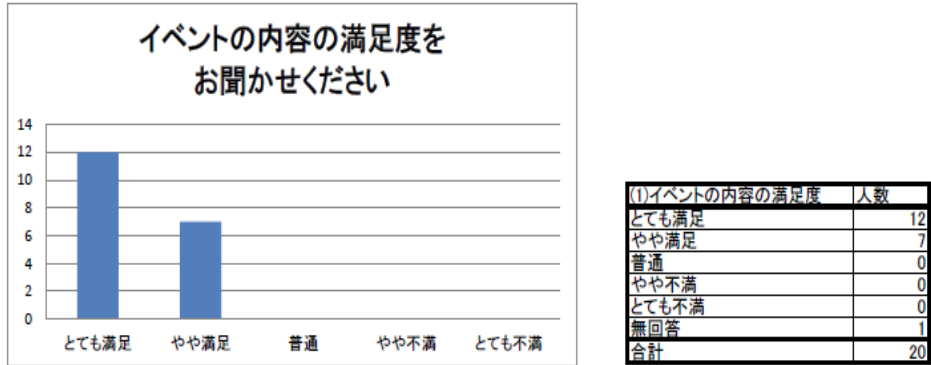


図 34 【English ビブリオバトル】のイベント内容の満足度



図 35 【English ビブリオバトル】開催時期・日程の満足度

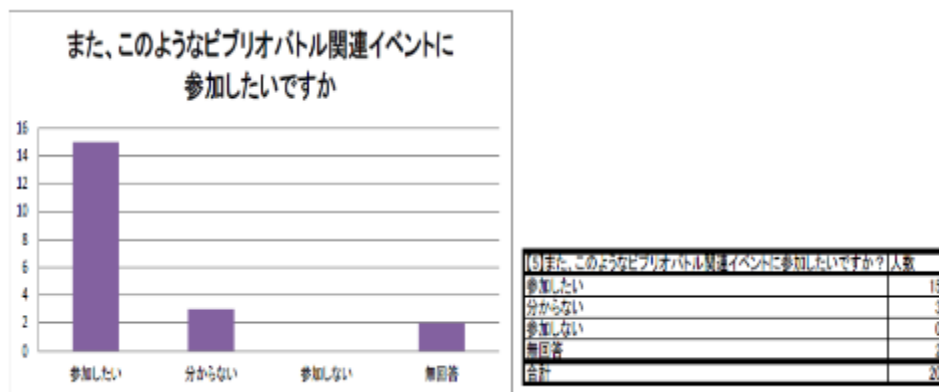


図 36 またこのような【English ビブリオバトル】関連イベントに参加したいか

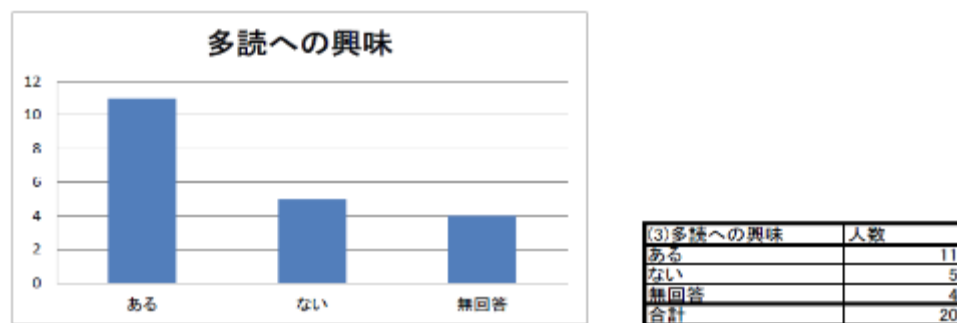


図 37 多読への興味

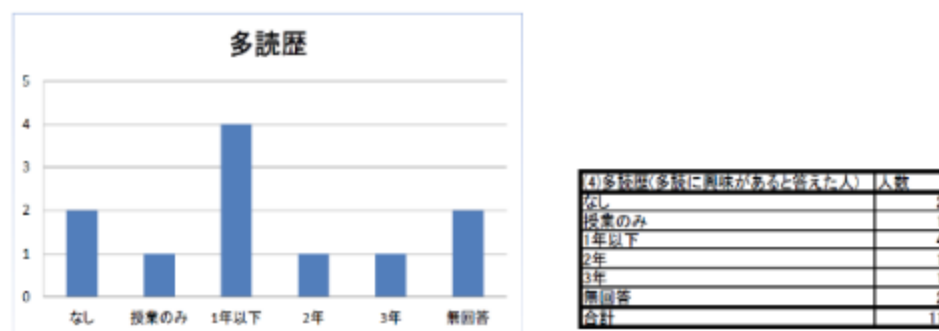


図 38 多読歴





【写真】English ビブリオバトルの様子

## ➤ GLC サポーターによる学生企画イベント

### ● 留学個別相談

留学を考えている学生が何でも気軽に相談できる窓口として、GLC サポーターによる留学個別相談を実施した。GLC サポーターで、「トビタテ！留学 JAPAN」奨学生や交換留学生、語学研修に参加した学生が、留学相談を担当した。良かった点としては、学生が相談に乗ることで、相談者がより来室しやすい環境が作れたことである。留学相談を継続して利用したことで、実際にトビタテ奨学生や交換留学に応募する学生も出てきた。また、担当の GLC サポーターは、自分の経験を通じた具体的なアドバイスをしながら、相談者の質問等に対応し、相談者にとっては細かいことでも聞きやすい体制であった。そして、毎回留学相談カルテを作成・活用したことで、相談者に次回までの課題を提示することや、複数の担当者間で相談者の相談内容を共有し、スムーズな相談体制を整えた。

反省点としては、広報について、GLC を中心にチラシやポスター掲示をしていたが、効果があまり伺えなかった。この留学相談は今年度新しい取組だったので、学生間で学生による留学相談がまだ十分に浸透しておらず、相談者 0 の日もしばしばあった。

上記の内容を踏まえて今後の展望として、広報については今まで通り GLC へのチラシ設置、ポスター掲示に加え、留学関連イベント等で積極的にチラシを配布したり、新入生のオリエンテーションなどで紹介していくことも検討していきたい。

運営について、現状は「できれば予約」となっているが、より細やかに確実に対応できるよう「原則予約」とし、予約システムを活発化していくことが望ましい。今後は、相談者が担当者からのアドバイス、次回相談までの課題、次回相談予定日等の相談内容をフィードバックできるような書き込み式の資料の作成を行っていく予定である。



【写真】留学個別相談の様子

- トビタテ！留学 JAPAN ポスター・ジャック（第8期）



【写真】トビタテ！留学 JAPAN ポスター・ジャック（第8期）

- 第1回留学相談会「トビタテ！×留学」

この留学相談会では、トビタテ！奨学金についての詳細な説明やトビタテ留学についての計画の立て方などをトビタテ留学経験者が丁寧にわかりやすく参加者に伝えた。企画者の二人はどちらもトビタテ奨学生で、熱心に参加者の質問にも応え、相談会後のアンケートでは参加者の100%がこの相談会に参加して「満足」と答えた。



【写真】第1回留学相談会「トビタテ！×留学」

- トビタテ！留学計画書書き方ミニ講座

附属図書館まなびのひろばにて、「トビタテ！留学」に関する計画書の書き方のコツやどの点に留意して計画書を作成すればよいのか等をわかりやすく解説・説明し、ミニ講座を実施した。



【写真】トビタテ！留学計画書書き方ミニ講座

- 第2回留学相談会「就活×留学」

第2回の留学相談会の目的は、将来は就職活動を視野に入れつつもこれから留学に行こうと考えている学生に対して「ただ語学力を向上させる留学ではなく、語学力以外にも



目的を持ち、どうして留学に行くのか。留学と将来がどう自分の中で繋がるのか」ということを考える機会にしてもらう為に企画・実施した。企画者は「トビタテ！留学 JAPAN」経験者であり、留学から帰ってきた学生に対し、就職活動が始まる時期までに何をしておくといいのかという点についても、自身の経験を振り返ってその情報を発信した。「就活×留学」の2つの視点から、ワークシートを用いて参加者とともにワークショップ形式で考える機会となった。



【写真】第2回留学相談会「就活×留学」

### ● 英語学習会

この学習会の主な目的は、英語を基礎から学び直すことであり、さらに英語を頭から読取る習慣を付けて、英語を速く読む力を育てることを目標としている。その中でTOEIC®や英検2級の文法問題や読解問題を活用し、実践力を養っていくことが目的である。

比較的初心者向けの学習会であり、基礎基本に戻って英語をもう一度やり直したい学生にとっては学び直しの機会となるよいきっかけとなった。



図 39 英語学習会 ポスター

### ● Fair Trade Tea Time

「フェアトレード」という名称の商品が最近大手スーパーやコンビニなどでも発売されるようになり、よく耳にする言葉となってきたが、「フェアトレード」を知っている人はまだまだ少ないのが現状である。一般社団法人日本フェアトレード・フォーラムによると2015年における「フェアトレード」の認知度は29.3%にとどまった。今では小中高問わず社会科や英語科、家庭科などの教科書にも取り上げられている言葉であるにもかかわらず、「フェアトレードとは何か」「私たちの生活とどのように関わっているのか」を知らない人が多いように思われる。教員になるかならないかに関わらず一般教養の一つとして「フェアトレード」について実際にフェアトレード食品を食べながら気軽に知り、考え、意見を交換する機会を作るべく企画するに至った。



図 40 Fair Trade Tea Time  
ポスター

この企画を通して少しでも「フェアトレード」について理解し、自らの意見を持ち、そしてその過程を通して、世界で起こる現状に対して関心を持つきっかけとすることを目的のひとつとした。企画者は、3年次休学時、フェアトレード発祥団体である OXFAM という国際 NGO のキャンペーン・啓発部門でインターンを行った経験があり、他にも国際支援の NPO でボランティアとしてネパールやフィリピンなどの途上国へ赴き、現地の NGO と協働して支援活動を行っていた。

そのため、今回の企画では、単にフェアトレードについて紹介するというだけでなく、将来国際機関や国際 NGO での就職を視野に入れている学生への情報提供や支援という側面も盛り込まれていた。実際の授業でフェアトレードについて学んでいるという学生の参加もあり、参加者は終始熱心に企画者の話に耳を傾けていた。

最後に、フェアトレードの商品を味わいながら、フェアトレード商品の生まれる背景、それらを取り巻く世界情勢や、国際機関で働くとはどういうことかなどについても考え、意見を交わした。



【写真】 Fair Trade Tea Time の様子

### 【Fair Trade Tea Time アンケート結果】

<参加者>

□人数：9名

□属性：小学校社会 4回生 2名 / 自然科学 4回生 1名 / 社会文化 2回生 1名  
欧米言語 2回生 1名 / 小学校体育 1回生 1名 / 小学校家庭 3回生 1名  
芸術美術 2回生 1名 / 留学生 1名

<参加者アンケート結果>（回答者数 9）

Q.企画満足度・・・8.9点 / 10段階評価

Q.参加して感じたことに当てはまるものは？ ※複数回答可

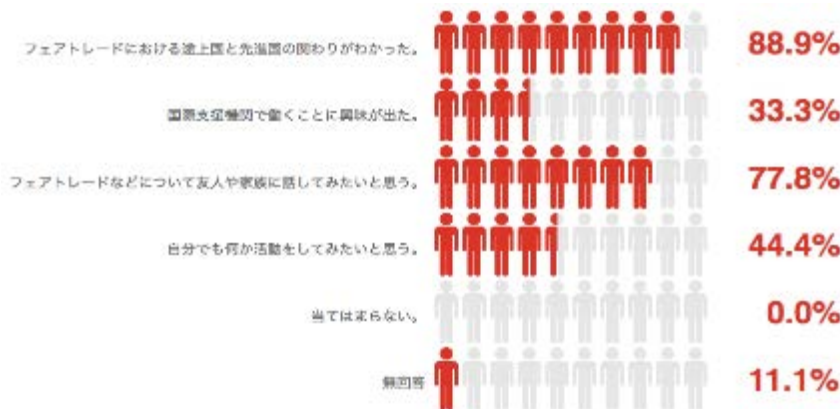


図 41 Fair Trade Tea Time に参加して感じたこと

Q.GLC に来たことがあるか

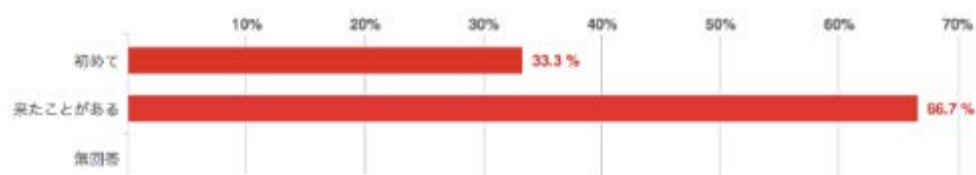


図 42 GLC への来室経験

Q. 良かった点 (一部抜粋)

- ・フェアトレードというものについて、詳しく知ることができた。フェアトレードに対する熱い気持ちが伝わって来たり自分にとってすごくいい刺激になった。
- ・フェアトレードっていいイメージしかなかったけど、問題点もいっぱいあって日本ではまだまだ途上な分野だと思った。

Q.改善したほうが良い点 (一部抜粋)

- ・もう少し時間が欲しかった。
- ・いいイベントなので回数を増やして欲しい。

<最後に(企画者より)>

88.9%の学生がフェアトレードについて理解したと回答しており、そして 77.8%の学生がフェアトレードなどについて友人や家族に話してみたいと回答している。本企画の目的である“「フェアトレード」について理解し、自らの意見を持つ。そしてその過程を通して、世界で起こる現状に対して関心を持つきっかけとする。”を概ね達成したと考えられる。また、44.4%の学生が自分でも活動してみたいと思うと回答しているため、今後とも GLC を中心に国際に対しての理解を促進していける企画を考え、共に行動して行きたいと考えている。

<次回に向けて>

今回は上記の広報媒体に加えて、フェアトレードをテーマの一つとして取り扱っている「西洋史概説Ⅰ」の講義において全受講者(約 70 名)にチラシを配布することができた。そこで参加を決めた参加者も 1 名いたので、次回は関連するテーマを教えている講義や教員にも協力を仰ぎ、より多くの学生に参加してもらえるように広報して行きたいと考えている。

### ● トビタテ！留学 JAPAN ポスター・ジャック (第 9 期)

今回は、前回のポスター・ジャックの際に附属図書館からの助言を受けて、ポスターだけでなく文字も入れ、何を目的としたポスターかがよりわかりやすくなった。また、掲示場所も附属図書館と共通講義棟の一番大きな窓に掲示をすることができたため、さらに多くの学生に「トビタテ！留学」とその奨学金についての存在を知ってもらう機会になった。



【写真】トビタテ！留学 JAPAN ポスター・ジャック (第 9 期)



## ● 留学強化月間

本学全体における留学機運は、交換留学志願者増加からも分かるように、この数年で高まりつつある。しかし所属や専攻によっては、周囲に留学を志す学生が少なく、身近に留学について相談できる相手がいないことから、留学へと踏み切れない学生が依然として多いのが実情である。その原因として、留学に対する語学面や金銭面での不安等が考えられる。

そこで、この留学強化月間では、各日それぞれのテーマに沿った留学質問会の実施を通して、以上の問題の解決に貢献することを目的とした。実施期間は「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」9 期募集に伴うポスタージャック期間（2017/12/21（木）～2018/01/10（水））に合わせ、「留学強化月間」とすることで、大学全体で、かつ学生主体で留学を支援するという機運を一層高めることを狙いとした。また、時間を昼休みに設定したのは、同時間帯が最も学生の都合がつくと考えられ、また気軽に参加しやすいと考えたためである。対象となる学生は、留学に関心があるが、①「留年」や「休学」に抵抗がある、②金銭面での不安、③語学面での不安等の理由から一步を踏み出せない学生などである。

質問会を担当したのは、本学の交換留学やトビタテ留学経験者の GLC サポーターである。学生同士で質問しやすい雰囲気の中、学生が自主的に自律学習へ一步を踏み出し、互いに学び合う文化を醸成していくという狙いもあった。中には繰り返し参加する学生も見られ、参加者の感想から、上記の目的と狙いは、徐々に達成してきているといえる。



図 42 留学強化月間 ランチャタイム質問会



【写真】留学強化月間 ランチャタイム質問会

## ➤ 学生サポーター

### ● GLC サポーター（日本人学生）からみた GLC（一部抜粋）

私は 1 回生の時、ランチタイムチャットをやっていることを知って、GLC に来るようになりました。当時は「英語を話せるようになりたいけど、間違ったらどうしよう。間違っていると思われるのが恥ずかしい」という思いが強く、なかなか積極的になれず、もどかしかったことを覚えています。しかし、GLC に通うようになり、以前よりは英語に対して前向きになることができました。また、留学生の皆さんと関わったり、留学経験のある先輩方からお話を聞いたりする中で、世界には色んな文化や考え方があること・その多様性の面白さを知りました。

今年度に入り、先生方や GLC の環境が大きく変化しましたが、以前よりも学生が主体となって盛り上げて行けるようになり、良かったと思います。

最後に、一利用者・一サポーターとして、これからも GLC が様々な学生にとって有意義な場所であって欲しいと願っています。

## ● ・GLC サポーター（留学生）からみた GLC（一部抜粋）

### 1. 良かった点

- ・ GLC にある本や参考書が多くて、日本語以外の外国語を勉強したい留学生にとっては便利。
- ・ GLC でサポートしているサポーターは日本人と留学生がいるので、国際交流が良く出来て楽しかった。
- ・ 季節によってイベントのテーマやコンセプトが変わり、やってよかったと思っている。

### 2. 反省点

- ・ 書籍に関して、留学生に対する日本語能力試験に関係する本や参考資料が非常に少ない。
- ・ ICT に関して、外国語の学習のための色々なアプリを入れたが、利用する学生があまり見られない。

### 3. 課題

- ・ GLC にある本がどんどん増えていくが、留学生向けの本があれば、GLC に来る留学生がもっと多くなると思う。特に、日本語の学習に関する本がもっとあれば良い。
- ・ iPad で外国語学習ができることなどを知っている学生が少ないので、GLC でできることリストを作り、ドアの近くに貼り GLC でできることを学生に周知するとよい。学生がそれを知れば、今よりもっと利用出来るようになると考えている。

## ➤ 広報活動・情報発信

今年度は、GLC 公式ツイッターを開設し、GLC での様々な講座やワークショップやセミナー、イベントなどの紹介を随時更新し行っている。2017 年 10 月より本運用となり、情報発信量としては全体としてはまだ少ないが、徐々にフォロワーを増やしてきている。学生にとって今後も外国語学習に関する有益な情報を発信し、GLC への来室動員数に結び付くよう、今後もより多くの情報を発信していく予定である。

内容については、GLC に限った発信が主であったが、今後は学生にとって有益となる外国語学習の自律学習を促すような情報発信などもしていきたいと考えている。

広報に関して、講座や企画を行うにあたり、いかに効果的なタイミングでの広報活動が重要になってくるかも学んだので、次年度は様々な関係部署とも連携をし、GLC の広報活動をより活発に行っていく計画である。

### ＜平成 29 年度の主な広報活動＞

- ・ GLC 公式ツイッター開設 アカウント：OKU\_glc
- ・ International Office 公式 Facebook アカウント：OKU International Office
- ・ 掲示板・学内モニター
- ・ GLC TIMES 毎月発行（GLC サポーター広報部より）：GLC のイベント・講座の紹介等
- ・ ホームページ改訂
- ・ 新 GLC リーフレット作成



➤ 自律的な学習支援モデルをめざす GLC の今後の展望について

前年までの多読プログラムに続いて、今年度は学生の GLC サポーターによる学生企画活動やイベントが多く、学生が主体的に企画や運営を行った。例えば、国際交流プログラムや留学相談会など、GLC のプログラムの一部として学生が計画、立案して動き、GLC のスタンスとしては、それを支援する形で様々な企画が実施された1年だった。GLC の目玉の一つであるイングリッシュ・チャットについても、チャットプログラムをより良いものにしていくため、「どのようにすればもっと多くの学生が英語を話す機会を得られるか」といった議論が、日常の何気ない風景の中で GLC サポーター同士で展開されている姿が見られた。

そのようにして、まずは GLC サポーター自身が自律的な学習モデルを示すことで、GLC を利用する学生が自然とその流れの中に溶け込み、まだ開発途上ではあるが、学生同士が教え合い、学び合う自律的学習モデルが形成する土台が整いつつあった。その中で、GLC のスタッフとしては、学生が提案・作成した企画書を語学教育部門会議で議論・検討し、「自律的な外国語学習」をひとつの目標の柱に据えて、できるだけ前向きに実施できるように進めてきた。学生としても、自分たちで企画したものが参加した学生からの嬉しいフィードバックとして返ってきたとき、大きな自信に繋がり、また更なる良い企画を生み出す原動力となり、学生自身の学びを深めるより良いセルフ学習サイクルも生まれていたようだ。

English ビブリオバトルも、学習者にとって多読をより活動的に発信する貴重な機会となった。多読プログラムの中で発表するという機会を設けることで、一人でコツコツと忍耐強く続けなければならない作業が、いつしか緊張感をもった楽しみのある活動へと変化していく。時間はかかるが、多読は確実に力がついていく活動なので、その効果をこれから検証することにも挑戦していきたい。

今後の課題としては、今年度走り始めた英語科教員採用試験対策や、小学校英語ワークショップ、また長期的な視点では学生を近隣の小学校へ派遣する小学校英語出前授業など、今年度の内容を踏まえて前向きに、着実に検討していきたいと考えている。今後も一人でも多くの学生が GLC を活用することで、真の Global Learning Community「学びの共同体」を形成し、世界に繋がる一步を踏み出せるよう外国語学習支援のモデルを提示していきたいと考えている。

次年度に向けて、新しく発足したグローバルセンターや語学教育部門とも丁寧に連携を図りながら、今年実施した内容を振り返り、より効果的な外国語学習支援のあり方を検討していきたい。



【写真】GLC サポーター



【写真】月一回の定例 GLC サポーター会議

### 3 大阪教育大学の地域における英語教育活動支援の取組

大阪教育大学 吉田 晴世

文部科学省（初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室）によると、グローバル化が急速に進展する中で、子供たちの将来の職業的・社会的な環境を考えると、外国語、特に英語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、様々な場面で必要とされることが想定され、今まで以上に、生涯にわたり、その能力の向上が課題となっている。

現行の学習指導要領では、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことを目標としているが、英語を外国語として学ぶ諸国における英語教育の状況を改めて踏まえることが必要である。その際、英語教育を通じて育成すべき資質・能力を明確化し、これらの資質・能力についての達成状況を明確化するための小・中・高を通じて一貫した目標を設定するとともに、学校において主体的に学ぶ態度を養い、英語の授業以外でも英語に触れる多様な機会や環境を整えることが求められる。

諸外国の状況を踏まえ、国際的に活躍する人材育成を目指した場合、高校卒業段階での達成目標を国際水準（CEFR の B1～B2 レベル）とすると、小学校中学年から英語教育を開始するとともに、中・高等学校での英語教育の指導改善及び高度化が必要と考えられ、実際、新学習指導要領実施からは、3・4年生から英語の必須化、5・6年生は教科化となる。

また、国際社会に生きる日本人として、日本人のアイデンティティを育成するため、我が国の歴史・伝統文化等に関する学習の一層の充実が必要である。

これらの提案を受け、ワークショップを実施する意義としては、国際社会で役に立つコミュニケーション能力を育成するために、目的と目標を明確に示したコミュニケーション活動を行い、英語の4技能、コミュニケーション・スキルの実践的能力、生徒のモチベーションの3要素を相補的に、統合的に伸ばす授業のあり方について理解させることが必至であろう。

直面している課題事項としては、優れた教員ほど多忙であり、研修への参加や他の教員への指導に集中できないとの声が多いことや、小・中・高等学校の教員の多くは指導力を向上させたいと感じているが、地域における研修機会は十分とは言えず、教育委員会・大学・外部専門機関との連携が十分と言えないなど、更なる充実を図る余地があると考えられる。

今後、現職の教員は、これまで受けてきた英語教育とは大きく異なる指導法や評価を行うことが求められ、それらに対応できる研修を行うことが喫緊の課題である。

国・地方公共団体による地域の教員研修のシステムづくりに当たっては、地域の中心となる「英語教育推進リーダー」の養成とともに、そうした者が地域の研修の企画・運営に参加することが可能となるようにすることを求めている。そのなかの項目の一つに「実践力を高めるためのワークショップ等」をかかげており、種々のワークショップに参加することで、参加者自らがそこで得た知識・ノウハウを現場に持ち帰り、指導を行っていくというサイクルが有効となろう。

具体的には、

- 1) 基本的な理論の習得

- 2) 授業計画および教材作成などの理論の応用
- 3) 教師の英語運用力を高め、教師が自ら協働作業を体験するための活動（例：ディベート、ドラマなど）を有機的に結びつけた研修等のプログラムを構成する。

このような体験的な研修を通して、研修者が研修後に研修成果を現場の授業に応用し、理論と実践から省察して授業を継続的に改善することができ、教師力をつけていくことをねらいとしている。

HATO プロジェクトでは、上記理念に基づき、種々の研修を行い、その成果として、地域の教育現場に還元し、教員養成大学としての使命を遂行することが肝要であるにとらえている。

本学における取り組みの実践・成果を以下にリストアップする。

・「イングリッシュ・キャンプ」

グローバル化が進む教育現場において柔軟に対応できる実践力を身につけることを狙いとして、平成 27 年度より、HATO 4 大学から小学校英語に強い関心をもつ学生が参加し、ワークショップと地域の児童を大学に招き様々な外国語活動を通して英語に親しむデイキャンプを実施しており、地元の柏原市教育委員会からは、継続的な実施を要望されるなど、地域貢献活動としても高評価を受けている。

＜平成 27 年度＞HATO 4 大学から学生 24 名が参加し、小学 3・4 年生を対象としたゲームや運動といった活動を通じて英語を楽しく学ぶことができるプログラムのデイキャンプを実施した。

＜平成 28 年度＞HATO 4 大学から学生 12 名が参加し、小学 5・6 年生を対象とした「五感」をテーマに理科や算数といった他教科連携型の英語活動を実施するプログラムを実施した。

＜平成 29 年度＞大阪教育大学の学生 12 名が参加し、小学 3～6 年生を対象とした「世界のクリスマス」をテーマに歌やゲーム、クイズ、工作など楽しく英語を学べるプログラムを実施した。

・「こうして教える小学校英語」：来場者数 156 名 平成 28 年 8 月 28 日開催

本イベントは外国語学習支援ルームの協力を得て大阪教育大学教員養成高度化センターにおいて実施されたものである。2020 年より始まる小学校英語の教科化に伴い、学校現場における英語教育への不安を解消すべく、小学校英語における指導方法をワークショップ形式で伝える取組であり、また、冒頭では文部科学省国立教育政策研究所の教育課程調査官である直山木綿子氏による特別講演を開催し、当初の予定を大幅に超える参加者が集まった。

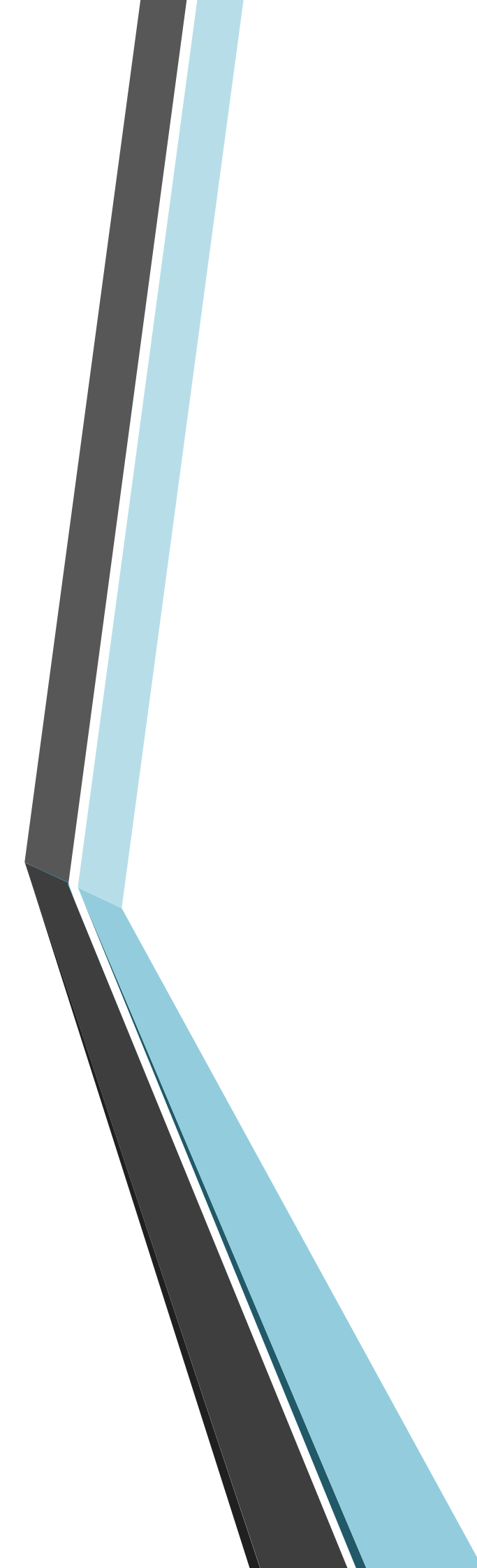
・「多読指導と英語教育」：来場者数 54 名 平成 28 年 12 月 23 日開催

本イベントは当プロジェクトの活動の一環として、自律的な学習方法としても近年注目されている多読をテーマとし、HATO の各大学による推薦のもと、多読について精力的に実践を行っている研究者に御登壇いただき、結果として非常にハイレベルな取組の紹介が行われた。

・「これからの英語教育—小中連携を踏まえて—」：来場者数 85 名 平成 29 年 2 月 5 日開催

本イベントは前述の 8 月に開催した小学校英語のワークショップに続く取組と位置づ

け、今回は小中連携をテーマとする発表を行った。8月に引き続き、国立教育政策研究所より直山氏にお越しいただき、平成28年12月21日に中央教育審議会でとりまとめられた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」について、特に小学校英語・小中連携のポイントについて御講演をいただいた。また、HATO研修・交流支援部門において取り組んできたカナダ・ビクトリア大学における海外教授法研修の成果としてHATO附属学校における授業実践の事例紹介もあり、最新の英語教育事情を学ぶことのできる機会となった。



## 第3章

# 愛知教育大学に おける取組

- 1 愛知教育大学における英語外部試験の  
取組
- 2 愛知教育大学における外国語学習支援  
－英語サポートセンターの取組－



## 1 愛知教育大学における英語外部試験の取組<sup>1</sup>

愛知教育大学 小塚 良孝・田口 達也・浜崎 通世

### 1. はじめに

2011年度から小学校外国語活動が本格実施となり、2020年度からは英語が教科化されるため、他の教員養成大学同様に英語力に関する質保証はここ数年本学の大きな課題であった。そのため、2012年度から TOEIC350 点を一部英語授業の単位認定要件とするとともに、英語学習環境の改善（e-learning 設備の充実、英語サポートセンターの設置等）を図っているところである。

本節では、愛知教育大学の外部試験への取組として、主に TOEIC の活用状況とその成果、課題を報告する。

### 2. 外部試験活用の背景

本学の英語関連授業は 2013 年度と 2017 年度に大きく変更された。2013 年度以前の入学者用カリキュラムでは、英語関連共通科目は、四技能全般を扱う「英語Ⅰ」（1 年前期）、「英語Ⅱ」（1 年前期）、「英語Ⅲ」（2 年前期）、「英語Ⅳ」（2 年後期）、コミュニケーションに焦点を当てる「英語コミュニケーションⅠ」（1 年後期）、「英語コミュニケーションⅡ」（2 年前期）の計 6 科目があったが、2013 年度入学者からは、英語Ⅲ・Ⅳが廃止され、さらには、2017 年入学者からは、教員養成課程の学生については英語Ⅱもなくなった。

その一方で、2011 年度から小学校外国語活動が必修化され、2020 年度からは英語の教科化が予定されている。こうした英語関係の授業では、学級担任が実施者の一人として規定されているため（文部科学省、2008）、小学校の教員免許を取得する者には一定程度の英語力が必要となった。また、教科化に伴い、2016 年度から愛知県小学校教員採用試験で「小学校英語特別選考」が始まり、TOEIC などの外部試験で一定以上のレベルをクリアしている受験者<sup>2</sup>は、その実績が一次試験の成績に加味されるようになった。

以上の学内外の状況から、本学学生は、TOEIC を始めとする外部試験で一定以上の水準に達する必要性が増し、そのためには、授業内だけでなく、授業外での学習への取り組み方がますます重要となっている。

### 3. TOEIC に係る取組

本学では 2005 年度から TOEIC を 1 年生、2 年生に実施してきた。当初はその結果が一部成績に加味される程度の扱いであったが、上述のような学内外の状況を受け、2012 年度入学者から TOEIC350 点を単位取得のために必須とするとともに、授業外学習支援のために、「英語学習なんでも相談室」（現「英語サポートセンター」）を開設し、さらに e-learning を導入した。英語サポートセンターは、当初は利用者が少なかったが、徐々に存在が認知され、毎年改善を重ねてきたことにより、初年度は皆無であった利用者が、昨年度は延べ 457 名、今年度は 10 月末時点で延べ 438 名に達し、本学学生の英語学習において非常に重要な位置を占めるまでとなった（この「英語サポートセンター」の運営状況については、第 3 章 2 で詳述する）。e-learning については、授業での活用、学生の自主学習での利用に加え、

教職員にも開放し、研修の一環としても利用している。このように、TOEIC を軸として、全学的に英語学習の雰囲気や文化の構築を目指しているところである。

#### 4. スコアの推移

様々な対策を講じることで、2005 年以来実施している本学学生の TOEIC スコアは表 1 のように推移した。つまり、350 点を課し、授業外学習支援を本格に実施し始めた 2012 年度から平均スコアが急上昇し、例年全国の大学 1 年生平均はもとより、大学生平均も上回るようになり(表 2 参照)、愛知県小学校教員採用試験特別選考の出願資格の一つである 500 点も大学全体として視野に入るまでになっている。

表 1 愛知教育大学学生の TOEIC スコア (2005-2017)

| 実施年度 (月)    | 前期平均 (内訳)               | 受験者数 | 後期平均 (内訳)               | 受験者数 |
|-------------|-------------------------|------|-------------------------|------|
| 2005 (4/3)  | 384.6 (L 222.9 R 160.6) | 941  | 389.0 (L 215.4 R 173.6) | 692  |
| 2006 (4/1)  | 392.7 (L 228.8 R 163.9) | 908  | 407.3 (L 232.9 R 174.4) | 608  |
| 2007 (7/12) | 378.2 (L 210.3 R 167.9) | 885  | 390.7 (L 218.7 R 172.0) | 878  |
| 2008 (7/12) | 382.6 (L 205.7 R 176.8) | 923  | 380.9 (L 206.9 R 173.9) | 833  |
| 2009 (7/12) | 393.6 (L 210.6 R 183.0) | 935  | 383.4 (L 213.8 R 169.7) | 885  |
| 2010 (7/12) | 401.3 (L 220.6 R 180.7) | 943  | 408.4 (L 228.3 R 180.2) | 931  |
| 2011 (7/12) | 403.1 (L 220.3 R 182.8) | 981  | 416.6 (L 229.8 R 186.8) | 965  |
| 2012 (7/12) | 449.3 (L 245.0 R 204.4) | 954  | 444.2 (L 249.2 R 195.0) | 948  |
| 2013 (7)    | 460.6 (L 250.4 R 210.2) | 957  | 実施せず                    |      |
| 2014 (7/12) | 440.7 (L 238.6 R 202.1) | 938  | 449.0 (L 252.3 R 196.7) | 940  |
| 2015 (7/12) | 455.1 (L 247.9 R 207.2) | 936  | 446.0 (L 249.1 R 196.9) | 922  |
| 2016 (7/12) | 450.3 (L 247.9 R 202.3) | 944  | 440.0 (L 247.1 R 192.3) | 897  |
| 2017 (7)    | 469.2 (L 252.6 R 216.7) | 920  | 未実施                     |      |

表注 1. L=Listening, R=Reading

表注 2. 2013 年後期はカリキュラム改変に伴い実施せず。

表注 3. 2012 年度までは 1 年次に 2 回、2013 年度入学者から 1 年前期と 2 年後期に各 1 回、という受験日程となった。

表 2 全国の大学生の TOEIC IP 平均スコア (2005-2016)

|      | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012 | 2013 | 2014 | 2015 | 2016 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 全体   | 437  | 428  | 433  | 430  | 441  | 445  | 445  | 433  | 440  | 440  | 443  | 444  |
| 1 年生 | 401  | 401  | 406  | 405  | 412  | 418  | 421  | 412  | 423  | 424  | 427  | 430  |

(『TOEIC テスト Data and Analysis 2005-2016』に基づく)

#### 5. 外部試験活用状況

TOEIC をはじめとする外部試験の結果は、上述のような一部の英語の授業の単位要件以外にも、認定単位要件、海外研修・協定校への派遣留学の選抜時の参考資料としても活用している。現在の認定単位の取得基準については、表 3 のとおりである。

表3 現在の認定単位取得基準

| 対象授業名（開講時期） | TOEIC | TOEFL |          |          | 英検  |
|-------------|-------|-------|----------|----------|-----|
|             |       | Paper | Computer | Internet |     |
| 英語Ⅰ（1年前期）   | 600   | 500   | 170      | 60       | 準1級 |
| 英語コミⅠ（1年後期） | 650   | 520   | 190      | 68       |     |
| 英語コミⅡ（2年前期） | 700   | 540   | 210      | 76       |     |
| 英語Ⅱ（2年後期）   | 750   | 560   | 230      | 84       |     |

また、上述のように2016年度の愛知県小学校教員採用試験から小学校英語特別選考が始まったので、新入生ガイダンスなど機会を見てその旨周知し、外部試験に対する意識の向上を図っている。

## 6. まとめ

以上、述べてきたように、社会的な（特に小学校教員の）英語力に対するニーズの変化に対応すべく、本学学生の英語力をより高い水準で保証するために、外部試験を一部の授業の単位要件やその他さまざまな基準として活用するとともに、授業外での学習支援体制を充実させているところである。その成果は一定程度現れ始めているところであるが、より効果的で有意義な支援策を今後も大学全体で追求する必要がある。

## 注

<sup>1</sup> 本節は、HATOプロジェクトの支援に加え、2010年・2013年度「小学校英語を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」、2014・2015年度に交付を受けた文部科学省特別経費により実施した研究「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発ー海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力養成カリキュラムの構築ー」などの支援を受けて実施した研究教育活動の成果の一部である。

<sup>2</sup> 出願資格は、TOEFLにおいて、PBT470点以上又はiBT52点以上、TOEIC500点以上、実用英語技能検定1級、準1級、又は2級のいずれかを取得していることである。

## 参考文献

- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2006）『TOEIC テスト Data and Analysis 2005』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2005.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2005.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2007）『TOEIC テスト Data and Analysis 2006』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2006.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2006.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2008）『TOEIC テスト Data and Analysis 2007』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2007.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2007.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2009）『TOEIC テスト Data and Analysis 2008』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2008.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2008.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2010）『TOEIC テスト Data and Analysis 2009』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2009.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2009.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2011）『TOEIC テスト Data and Analysis 2010』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2010.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2010.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2012）『TOEIC テスト Data and Analysis 2011』。参照先：[www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2011.pdf](http://www.toEIC.or.jp/toEIC/pdf/data/DAA2011.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2013）『TOEIC テスト Data and Analysis 2012』。参照先：[www.toEIC.or.jp/library/toEIC\\_data/toEIC/pdf/data/DAA2012.pdf](http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC/pdf/data/DAA2012.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会（2014）『TOEIC テスト Data and Analysis 2013』。

- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2015) 『TOEIC テスト Data and Analysis 2014』. 参照先 : [www.toeic.or.jp/library/toeic\\_data/toeic/pdf/data/DAA.pdf](http://www.toeic.or.jp/library/toeic_data/toeic/pdf/data/DAA.pdf)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2016) 『TOEIC テスト Data and Analysis 2015』. 参照先 : <http://www.iibc-global.org/library/default/iibc/press/2015/p042/pdf/DAA.pdf>
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会 (2017) 『TOEIC テスト Data and Analysis 2016』. 参照先 : [http://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official\\_data/pdf/DAA.pdf](http://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/pdf/DAA.pdf)
- 小塚良孝・田口達也・藤原康弘・小川知恵 (編) (2012) 『e-learning と TOEIC を活用した英語教育 : 教員養成の立場から』. 名古屋 : 中部日本教育文化会.
- 小塚良孝・藤原康弘 (編) (2011) 『教員養成における英語教育のこれから : 小学校外国語活動を見据える』. 名古屋 : 中部日本教育文化会.
- 田口達也・小塚良孝 (編) (2014) 『英語学習自律の向上と学習文化の構築を目指して : 愛知教育大学の在り方』 名古屋 : 鳴海出版.
- 田口達也・小塚良孝・小川知恵 (編) (2013) 『英語力向上に向けた愛知教育大学の挑戦 : 質保証と学習自律向上を目指して』. 名古屋 : 中部日本教育文化会.
- 田口達也・小塚良孝・浜崎通世 (編) (2016) 『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み : 英語力と学習意欲を 高める学習環境の充実に向けて』. 名古屋 : 鳴海出版.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』.  
参照先 : [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/gai.htm)

## 2 愛知教育大学における外国語学習支援 ー英語サポートセンターの取組ー<sup>1</sup>

愛知教育大学 稲垣 真由美・山田 美樹・長峯 貴幸・小塚 良孝

### 1. 設置の経緯

本学では 2012 年度より TOEIC350 点を英語授業の単位認定条件としたことから、英語を苦手とする学生に対するサポートを目的とし、「英語学習なんでも相談室」（現「英語サポートセンター」）を設置した。発足当初は英語力不振者のサポートが主であったが、利用者の口コミと海外実習派遣業務に関わる学生たちの利用などにより利用者が増え続け、現在では、英検取得や TOEIC でより高得点を目指す学生のサポートと同時に、留学希望や大学院進学に関わる相談や学習サポートなども請け負うようになった。利用者の増加とともに大学内での認知度も上がり、英語の苦手な学生も得意な学生も利用し、多様な英語学習、留学相談に幅広く対応する場所として、英語サポートセンターが根付き始めている。

### 2. 業務内容

現在行っている英語サポートセンターの主な業務は以下の通りである。

- ・全学生対象の英語学習に関する相談・啓発（TOEIC 対策・英会話・留学相談等）
- ・英語に関する書籍・問題集・DVD の貸出・利用啓発・利用助言
- ・オーストラリア教育実習プログラムの運営
- ・（英語教員が関わる）短期国際交流プログラム実施支援
- ・英語学習ソフト（e ラーニング）の運営・管理・利用啓発
- ・英語Ⅰ，Ⅱにおいて TOEIC350 点に満たない学生の補習学習支援
- ・英語Ⅰ，Ⅱにおいて TOEIC350 点に満たない学生に対する補習試験運営

これらの業務は研究補佐員が教員や関係部署と相談しながら遂行するが、英語学習の指導や留学相談に関しては学生チューターを配置している。学生チューターは、大学院生あるいは留学経験者から選び、留学に必要とされる英語力や、資格試験に向けての勉強法などについて具体的なアドバイスを行う。支援する側とされる側がともに学生であるので、同じ目線に立ったきめ細やかなサポートを受けることが可能であり、学生チューターにとっても教育指導力向上にもつながるなど、この支援体制のメリットは非常に大きい。

### 3. 利用状況

発足当初は基本的に事前予約制としていたが、学生が空き時間等に気軽に利用できるようにするため、2014 年度より開室時間を平日の 10:30～16:00（通年）とし、その時間内は常時相談等を受け付けている。利用者数の推移と相談内容の詳細は表 1、表 2 に示した通りである。



表1 利用者数の推移（図書・DVDの貸出人数(※1)は除く）

|         | 利用者数（延べ人数） | 備 考           |
|---------|------------|---------------|
| 2014 年度 | 218 名      |               |
| 2015 年度 | 373 名      |               |
| 2016 年度 | 457 名      |               |
| 2017 年度 | 438 名      | 4 月～10 月までの集計 |

表2 利用内訳（2016 年度）

| 利用の目的                 | 利用者数(延べ人数) |
|-----------------------|------------|
| 英語学習                  | 120 名      |
| 英会話                   | 119 名      |
| 相談                    | 97 名       |
| 英語補習関連                | 50 名       |
| その他（派遣留学、海外教育実習サポート等） | 71 名       |
| 図書・問題集・授業 DVD 貸出（※1）  | 186 名      |

表1に示したように、センター利用学生は年々増加している。利用学生数は、主に利用した学生からの「口コミ」で増えているようだが、その背景には、小学校英語の教科化や、センター試験の後継として民間英語語学試験（例：実用英語技能検定やTOEIC等）が注目されるなど、社会のニーズによって学生たちの中での英語学習への関心が高まり、その受け皿として英語サポートセンターが大いに機能しているということがある。また、英語学習書籍・資格試験問題集・デジタルアーカイブ（小中高や大学での授業実践を収録したDVD）などを充実させたことも利用者の増加につながった。

利用学生には、初回来室時にカウンセリングシートを記入してもらうことで相談内容や希望等をきめ細やかに把握し、定期的・継続的なサポートを希望する学生には、来室可能な曜日・時限を提示してもらい、固定担当となるチューターを決定する。チューター1人が担当するコマに対し、受け持ち学生数は1～5名程度とし、学習者レベルもある程度揃えることで効率よく学習できるように努めている。

また、問題集の貸し出しのために学生がセンターを訪れる際にも、学生たちの目指すところや学習法などに関する聞き取りを行なっている。利用者が増えたことで、学生たちの生の声をより多く集めることができ、より良いアドバイスをすることができてきている。

#### 4. 相談内容の傾向

本学では2012年度からTOEIC IPの受験を「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」受講の際に課しており、350点以上を取得することが授業単位の要件となっている。そのことから、本センターに来室する学生の相談内容としてはTOEICに関する項目が最も多い。また、留学関係や就職に関わる資格試験の相談も増加傾向にある。相談に際しては、学習困難を自覚していない学生も多いため、学生との対話を重視している。以下に主な相談とサポートの内容を示す。

- TOEIC・英検などの資格試験に関する相談
  - ・初めて TOEIC を受験する 1 年生からの不安の声
  - ・就職活動や教員採用試験に向けて TOEIC で高得点を目指したい

2017 年度より愛知県小学校教員採用試験で小学校は TOEIC500 点以上を取得している際には成績に加味され、中高英語は TOEIC860 点で 2 次の英語面接が免除となっていることから教員採用試験や就職活動に有利となるため TOEIC のスコアアップを目指す。学生チューターによる個別指導や TOEIC 対策講座を適宜実施し学習の啓発を行っている。

- 留学に関する相談
  - ・今後海外留学を考えているが何をどのように準備すればよいのか

近年、1 年の入学時から留学を視野に入れている学生が増え、留学に向けて必要な英語力はどのくらいか、留学資金の準備方法など具体的なアドバイスが求められている。そのため留学経験のある研究補佐員・学生チューターより適切なアドバイスを行っている。

- 英語を話すことに関する相談
  - ・英語を話すことに抵抗がある
  - ・留学生と話せるようになりたい
  - ・留学からの帰国後、英語力を維持したい

卒業後の英語の必要性を感じ、大学在学中に英語を話せるようになりたいと考える学生が増えていることから昼休みに「ランチ de 英会話」を定期的の実施し、気軽に英語を話せる場を設けている。

- その他の相談
  - ・大学院入試対策（英語論文読解，ライティング）をしたい
  - ・学会発表のため英語でのプレゼンの練習がしたい（英語専攻以外の教員からの要望により実施）

## 5. e ラーニングサポート

2016 年後期より新たに導入した英語学習ソフト「ALC NetAcademy Next」のアカウント登録、管理を行っている。本ソフトは、共通英語科目である「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」を受講する学生に提供されており、先述した TOEIC IP において 350 点に満たない学生への補習課題としても使用されている。また職員研修の一つとしても取り入れ、学生のみならず事務職員も利用できるようにしている。英語学習が苦手な、補習対象となった学生に対しては、補習期間に合わせて「e ラーニング勉強会」を開催して英語学習支援を行なっている。学生からは、スマートフォンやパソコン等で気軽に学習できる点や、スピーキング練習などが好評であり、机上の学習よりも、英語学習に取り組みやすくなっているようだ。

## 6. 英会話「English Time! On Campus」

2017年5月に普段は英語サポートセンター内で行っている英会話の出張版として、学生が空き時間等に利用することの多い建物（教育交流館）の1階で試験的に行った。本学外国人教員、学生、協定大学からの留学生の計11人が参加し、小グループに分かれて自己紹介し、時間で区切ってローテーションをし、英語での交流活動を行なった。参加者からは、普段学内で英語を使う場面が少ないことから「英語を使うことができた」、「また参加したい」など好意的な意見が多かった。一方、英語サポートセンターが、学生にとっては比較的不便な場所にあること、学内で英語を使う機会の少ないことなどの課題もこの取り組みを通して再認識された。



## 7. TOEIC 対策セミナー

2017年11月にTOEIC対策セミナーを2回開催した。この取り組みは2年生が12月に授業の一環でTOEICを受験することに合わせて行い、2日間で396名の参加があった。セミナーには、TOEIC指導において全国的に活躍している2名の講師（TIPS English Qualifications 石井辰哉氏、開名学院 TOEIC/TOEFL 主任 宮崎尚一氏）を招き、本学にて全学的に実施しているTOEIC IPに先立った対策法や、TOEICを活用した英語力向上のための秘訣等を学生に講義した。本学では、TOEIC IPにおいて先述の通り（第4項参照）全学的な点数基準を設けており、セミナーには、その点数を取得することを第一目標としていたり、それよりもさらに高い点数を目指していたりといった幅広い層からの学生が参加し、熱心に受講していた。

## 8. 今後の展望

教員養成大学として多くの教員を輩出している本学では、全学的な英語力の底上げが急務となっていることから、これまで以上に英語サポートセンターの機能の向上が求められていくであろう。引き続き、英語学習環境を整え、学生に積極的な学習を促していきたい。また、一方でここは英語を通じて人がつながる場であると感じている。英語サポートセンターが、得手不得手や人種に関わらず、目標を持った人が集まり情報交換を通じて刺激を受け、お互いを高め合う、そうした交流の場となることをスタッフ一同願っている。

### 注

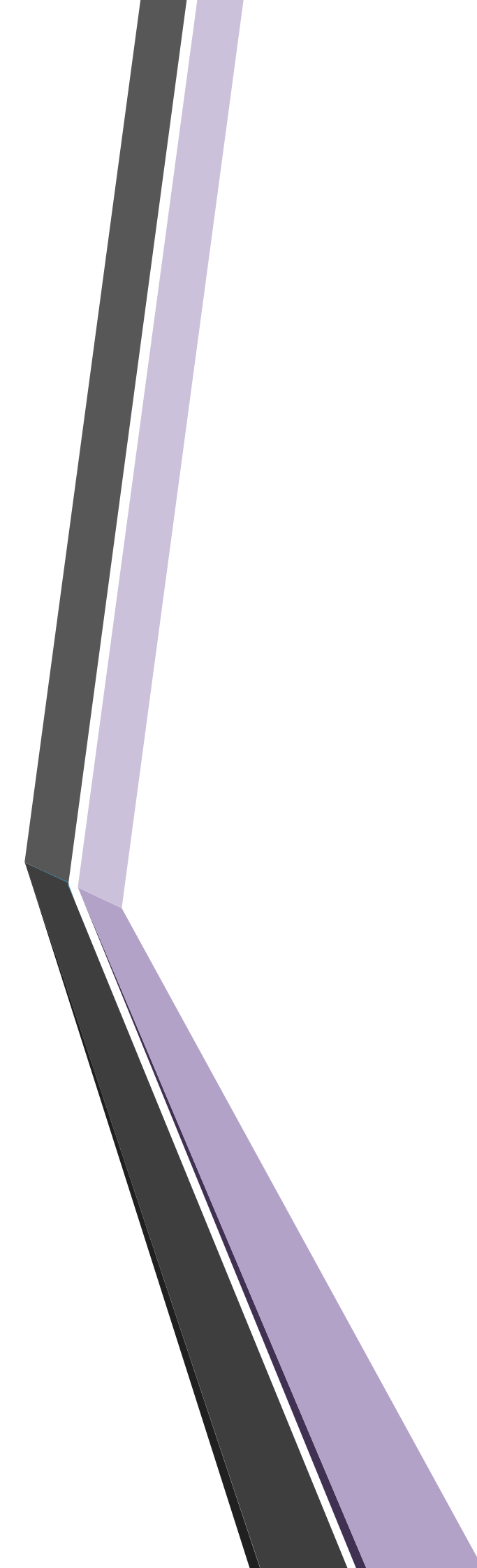
<sup>1</sup> 本節は、HATOプロジェクトの支援に加え、2010年・2013年度「小学校英語を前提とした小・中・高での英語関連科目の連携を進める英語教員養成カリキュラムの開発と授業実践力を高めるための教育改革」、2014・2015年度に交付を受けた文部科学省特別経費により実施した研究「グローバル人材育成を主軸とした教員養成等プログラムの開発―海外教育実習、体験型教育及び、英語コミュニケーション能力と指導力

養成カリキュラムの構築―」などの支援を受けて実施した研究教育活動の成果の一部である。

#### 参考文献・ウェブサイト

愛知教育大学英語サポートセンターHP URL <http://www.aue-english.aichi-edu.ac.jp/>

田口達也・小塚良孝・浜崎通世（編）（2016）『グローバル人材育成を目指した愛知教育大学の取り組み：英語力と学習意欲を 高める学習環境の充実に向けて』。名古屋：鳴海出版。



## 第4章

# 東京学芸大学に おける取組

### 1 東京学芸大学における外国語学習支援



## 1 東京学芸大学における外国語学習支援

東京学芸大学 馬場 哲生

### 1. はじめに

東京学芸大学において特徴的な取り組みは、全学共通科目として設定されている「英語集中演習 A・B・C・D」と、初等教育教員養成課程（A 類）英語選修と中等教育教員養成課程（B 類）英語専攻とを対象とする「英語指導実践演習」である。英語科教育学分野教員の指導のもとで行われている学生による自主ゼミ「ITC」と併せて、実践の概要を本稿で紹介する。

### 2. 英語集中演習 A・B・C・D

英語集中演習 A・B・C・D(各 2 単位) は、英語の授業を短期間に集中して実施することで学生が英語漬けになる環境を作る目的で作られた科目である。この科目は、毎年学部新 1 年生に配布する『スタディ・ガイド』において次のように紹介されている。

文法や和訳はさんざん学んだけれど、英語を実際にある期間集中して使ってみる機会がない、使ってみたくてうずうずしている、そんな人いますよね。そういう人たちに最適なのがこの科目です。1 年分の演習を夏や秋の休暇中、1 週間から 10 日間集中して行います。授業は少人数制で、内容は、英語の歌あり、ゲームあり、ディベート、ディスカッションあり、と盛りだくさんです。集中的に英語にどっぷり浸って、いつの間にか英語に慣れてしまいましょう。文法や発音の間違いなんか気にする必要はちっともありません。言いたいことを片言の英語でいいから相手に伝えましょう。このコースの後には充実した達成感と心地良い疲労感があるはずです。「英語集中演習 A」は上級レベル、「英語集中演習 B・C・D」は中級レベルです。

各コースの定員は 15~20 名で、内容はコースによって異なるが、英語を使って様々な活動を行う形式と、「日本語厳禁」というルールは全コースに共通している。

中級レベルの英語集中演習における 1 日の時間割例を以下に紹介する。学生は昼食時間も休憩時間も教室にとどまり、英語でコミュニケーションをすることが求められる。

09:00-09:40 Warming up  
09:50-10:50 Song Transcription  
11:00-12:00 Loudspeaker  
12:00-12:45 Lunch time  
12:45-13:30 Rapid Reading  
13:30-15:00 Afternoon Activity (1)  
15:00-15:20 Break time  
15:20-16:50 Afternoon Activity (2)  
16:50-17:00 Wrap up

Song Transcription においては、発音が明瞭で歌詞のストーリー性が高く、親しみやすいメロディーの曲を取り上げて聞き取りを行うほか、集中授業期間中に何度も歌う機会が提供される。その過程で学生たちは歌を自然と覚えていく。

Loud Speaker は、シャドーイングとディクテーションを組み合わせた活動であり、1 人

の学生がヘッドホンをつけて、初めて聞く英語の文章をシャドーイングし、他の学生はそれを書き取るというタスクを繰り返す。学生がシャドーイングで再生する英語音声は不完全なことが多いが、書き取る学生は、音声・語彙・文法の知識や文脈情報などを総動員して、聞こえない部分も含めて英語を再現することが求められる。

**Rapid Reading** は速読訓練であるが、読んで理解するだけでなく、ペアワークの形で自分の読んだ文章の内容をパートナーに伝え (**retelling**)、パートナーは聞いた内容をさらに別の人に伝える (**re-retelling**) タスクなども盛り込んでいく。この過程を通して、「内容を把握して人に伝える」という目的意識を持った読みができるとともに、文字で理解したインプットを音声でアウトプットすることによって、英語の発信力向上につなげていく。

**Afternoon Activity** のスロットには様々な表現活動が入り、日を追うごとに、より発展的で創造的な活動に移行していく。たとえば、**Picture Description** という活動においては、バラバラにした 4 コマ漫画の絵を描写し、グループで絵を再構成してストーリーを組み立て、さらにストーリーのその後の展開とエンディングを考えていく。**Role Play** では、単なるスキットの上演にとどまらず、思考・判断・表現の工夫を要するタスクが盛り込まれる。たとえば、ペアワークにおいて、1 人には「ペアの相手をデートに誘う」という指示が出され、パートナーには「デートの誘いを断る」という指示が出され、お互いの状況設定が明かされていない中で役割を演じていく活動などがある。**Video Shooting** では、4～5 人のグループで、ストーリー動画、ニュース番組、インタビュー番組などを作成する。

### 3. 英語指導実践演習

上記の英語集中演習は 15 名から 20 名程度の定員で実施されるが、ペアやグループで行う活動が多いため、担当教員 1 人だけで参加者に十分なケアをすることはできない。そこで大活躍するのが **Teaching Assistants (TA)** である。上級生や大学院生が学部の授業を補佐すること自体は珍しくないかもしれないが、集中演習の TA の大きな特色は、A 類英語選修と B 類英語専攻の学生を対象とする「英語指導実践演習」という授業として位置付けられており、学生は集中演習の TA をすることで単位を修得することができることである。

将来、英語教員を目指し、英語による授業運営の力が求められる A 類英語選修・B 類英語専攻の学生たちにとって、タスクや教材を準備したり、実際に英語で授業運営を行う訓練は欠かせない。英語の模擬授業は、「中等英語科教育法 I・II・III・IV」などの科目で行うが、英語指導実践演習においては、「模擬」ではなく、担当教員の指導の下で、実際に学部生に英語を指導する機会が集中的に与えられることが特徴である。授業においては、指示はもちろんのこと、参加者に与えるヒント、学生のパフォーマンスに対するフィードバック等をすべて英語で行わなければならない、自分が担当するグループの参加者の英語習熟度や雰囲気に合わせて、英語表現の難易を臨機応変に調節することを求められる。

TA は英語集中演習の期間中だけ参加するのではなく、早い時期から指導教員のもとでタスクや教材の準備をするため、さながら大学版の教育実習とも言える密度で、英語と英語指導のトレーニングができる。TA の事前準備の例として、5 月から 7 月にかけて 1 人につき週 1 回、合計 6～8 回程度の集中 TA トレーニングを実施しているケースがある。そこでは、ベテラン TA がインストラクターになって新人 TA をサポートしながら、集中演習本番に向けて準備をしていく。このように「先輩が後輩を育てる」「後輩は先輩から学ぶ」と

いう機会があることも、英語指導実践演習の大きな利点である。英語集中演習の受講者が TA にあこがれて「自分もいつかは TA になりたい」と思い、努力を重ねて TA デビューする、そして新米 TA が場数を踏むうちにスキルアップしていき、後輩の指導にあたるようになる。このサイクルによって「英語集中演習 A・B・C・D」と「英語指導実践演習」が成り立っていると言える。

#### 4. ITC

東京学芸大学は、学生による自主ゼミの形で開催される英語集中訓練プログラム ITC (Intensive Training Course) 発祥の大学でもある。ITC には、10 月と 3 月に 1 週間、合宿形式で行うものと、6 月と 12 月の土日 2 日間、通学形式で行うものがある。合宿形式の ITC では、参加者は都会から離れた合宿所で朝起きてから夜寝るまで、日本語は一切禁止で英語漬けの生活を行う。通いの ITC は Mini-ITC と呼ばれ、初めての人やまとまった時間の取れない人でも気軽に ITC を経験できる場となっており、参加者数が 80 名以上に及ぶことも珍しくない。

ここでは合宿形式の ITC について述べる。これは 1981 年に金谷 憲氏によって始められたもので、創始者の頭文字を関して KITC と呼ばれる。今日に至るまで 40 年近く続いている伝統あるイベントである。合宿の企画・運営はすべて学生 TA が行っており、TA は合宿の 3 か月前からほぼ毎週 TA 会を開催し、セッション内容の検討や試行に基づく改善を重ねている。そのノウハウは代々受け継がれ、発展してきている。

KITC には、A 類英語選修・B 類英語専攻以外の学生も多数参加するため、その英語運用能力には大きな幅がある。英語があまり得意でない参加者にも指示やヒント、フィードバックなどが適切に伝わるようにするためには、TA は英語スピーキング能力を向上させることに加え、自分の発する英語を学習者に合わせて調整する能力が求められる。この能力は、まさに学校現場において英語教員が英語で授業を進めていく際に必要な能力そのものである。文法や題材の Oral Introduction、活動の指示やヒント、生徒のパフォーマンスへのフィードバック、各種 Teacher Talk など、いずれも生徒に理解可能な英語でなければならない。この能力を身に付けるために、KITC は最適の学習機会であると言える。

かつて KITC に参加していた学生が大学教員となり、それぞれの勤務校で ITC を始め、多くの参加者を得ている。現在、他大学の ITC として、埼玉大学の SITC、武蔵大学の MITC (English-JAM)、都留文科大学の TITC、茨城大学の English Camp などがある。各大学の学生が相互の ITC に参加し合い、お互いを刺激し合う良い関係も生まれている。中・高等学校の英語教員になった卒業生が、教員対象の ITC を始めた例もある。

KITC は、自主ゼミであって授業ではないので単位にはならないし、大学院生が授業を補佐する TA と違って謝金がもらえるわけでもない。指導教員のアドバイスを得ながら、ボランティアの学生 TA たちが常にスキルアップの努力を怠らず、企画・運営を進めていく、その情熱は本物である。それが参加者に伝わり、次の TA が生まれていく。

ときは今、小・中学校の新学習指導要領の公示に続き、高等学校の学習指導要領改訂案が公開された。新学習指導要領の中核的なコンセプトは「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニング)であり、全ての教科において、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等、の 3 つを育むことが謳われている。KITC は、ま

さに新学習指導要領の理念を体現する学びの営みであると言えるだろう。

## 5. 終わりに

毎週の授業はとても大事であるが、週 1～2 回の授業で外国語の能力を身に付けることには限界がある。学生が恒常的・自主的に外国語を学べる環境づくり，そして集中して外国語漬けになる機会の提供が求められる。本稿で紹介した「英語集中演習 A・B・C・D」，「英語指導実践演習」「ITC」は，その有力なソリューションであると言えるのではないかな。







## 第5章

# 北海道教育大学に おける取組

- 1 北海道教育大学の英語外部試験の  
取組
- 2 北海道教育大学における外国語学習  
支援
- 3 北海道教育大学における地域支援の  
取組

---

## 1 北海道教育大学の英語外部試験の取組

---

北海道教育大学 萬谷 隆一

北海道教育大学では、英語力向上対策として TOEIC を指標として、教養英語等の科目において共通的に学期末成績に加味してきている(札幌校)。その結果、1年生の教養英語(266名)においては、4月から7月にかけて全体で約46点、リスニングにおいて約43点の向上が観察され、効果を上げていることが統計的にも示されている。また、質問紙調査においても、「英語Ⅰの TOEIC 対策の授業に熱心に取り組んだ」、「TOEIC570点以上を取得したい」、「TOEIC の内容は自分の将来のために役立つ」といった声が多く聞かれ、情意面において、充実感や目的意識を感じたり、具体的目標を意識したりする傾向がみられた。今後とも、英語力向上に向けて取り組みを進めていきたい。

---

## 2 北海道教育大学における外国語学習支援

---

北海道教育大学 萬谷 隆一

北海道教育大学では、英語教員免許状科目における e-learning を実施し、一定時間の履修を促している(札幌校)。とりわけ TOEIC の点数が基準に達していない学生については、補講を課しており、英語力向上が大学の授業外でも自学自習できるようなシステムを導入している。

補講に関しては、2年生対象の英語教員免許状科目(中学校英語科教育法Ⅰ・英米文学概論Ⅱ・英語学概論Ⅱ)において、所定の語学スコアを満たしていない受講生を対象に、e-learning による演習を実施している。

---

## 3 北海道教育大学における地域支援の取組

---

北海道教育大学 萬谷 隆一

北海道教育大学は、特に小学校英語にかかわって、積極的に事業を行い、地域に貢献してきた。

まず文部科学省の履修証明制度にもとづく英語教育指導者資格認定講座(平成25年～27年)、中学校普通免許2種の英語免許の認定講習(平成29・30年度)、小学校英語のための SNS サイト運営、北海道教育委員会が主催する English camp 事業への学生ボランティア派遣など、地域の英語教育のニーズに貢献している。



## ～ おわりに ～

急激な社会の状況において、社会の変革を担う人材育成、知的基盤の形成やイノベーションの創出など、「知の拠点」として、大学が、この国の発展に果たすべき役割は極めて大きいという視点に基づき、日本が直面する課題や将来想定される状況をもとに、目指すべき社会、求められる人材像・目指すべき新しい大学像を念頭に、平成 24 年、文部科学省は大学改革の方向性を「大学改革実行プラン」としてとりまとめた。

これを受けて、同年国立大学改革強化推進事業として、北海道教育大学 [H]、愛知教育大学 [A]、東京学芸大学 [T]、大阪教育大学 [O] の連携による「一教員養成ルネッサンス・HATO プロジェクト」が採択され、その後 6 年間にわたり、4 大学が連携協力し、教員養成の諸課題に積極的に対応することを目的として企画推進を続けてきた。4 大学それぞれに教員養成開発連携センターを設置するとともに、「IR 部門」「研修・交流支援部門」「先導的実践プログラム部門」を立ち上げ、4 大学が連携して具体的な活動を実施した。

本報告書は、「教職基礎体力を備え国際感覚に優れた教員の養成充実に向けた改革プロジェクト」の 6 年間にわたる成果を記述したものである。各大学の取り組みの背景と経緯・目的・成果が具体的に記載されている。4 大学のそれぞれの独自の取り組みを実施するとともに、TV 会議等を通じて意見交換を行いながら、目的遂行に向けて共通認識を高め、円滑な意思疎通を行った。

報告書には詳細が記載されているが、シンポジウム、講演会、報告会、イベント開催などを通じて、学生、院生が実際にともに活躍・話し合う機会が得られた。また、府市教委より広報等の協力を得て、地域への還元・普及に努め、アンケート等の結果より本事業の成果ならびに多くの示唆が得られた。

「大学改革実行プラン」は、大学改革実行期間を 3 つに区分し、PDCA サイクルを展開することと設定されている。

- ・ 平成 24 年度は、「改革始動期」として、国民的議論・先行的着手、必要な制度・仕組みの検討
- ・ 平成 25・26 年度は、「改革集中実行期」として、改革実行のための制度・仕組みの整備、支援措置の実施
- ・ 平成 27 年度～29 年度は、取組の評価・検証、改革の深化発展を実施し、改革の更なる深化発展を行う。

HATO 事業の 6 年間の取り組みは、この PDCA サイクルに基づいて行われてきたが、年度を重ねるごとに 4 大学間の強靱なネットワークが構築され、今後の方向性と指針が確立されたと言える。

平成 30 年 3 月吉日

教職基礎体力を備え国際感覚に優れた教員の  
養成充実に向けた改革プロジェクト責任者  
大阪教育大学 副学長・教授 吉田 晴世





